

公益財団法人 日本英語検定協会 委託研究

「教員の学習指導要領の理解の調査」報告書

研究代表者: 吉田 研作 (上智大学)

研究分担者: 藤田 保 (上智大学)

森 博英 (東京女子大学)

狩野 晶子 (上智大学短期大学部)

2017年6月8日

目次

1. 研究目的.....	1
2. 研究方法.....	2
3. 調査結果.....	4
3.1 研究課題1の分析結果.....	4
3.1.1 項目毎の分析結果.....	4
3.1.1.1 回答者の特性.....	4
3.1.1.2 中学校・高等学校の英語教員の英語教育の理念や目的への賛成度.....	10
3.1.1.3 アンケート選択用項目.....	18
3.1.1.4 中学校の英語教員の英語の活動や指導の実践度.....	19
3.1.1.5 高等学校における英語の活動や指導の実践.....	29
3.1.1.6 中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の重要度.....	42
3.1.1.7 中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度および理由.....	45
3.1.2 項目間の関係の分析結果.....	61
3.1.2.1 英語の活動や指導の重要度と実施度の関係.....	61
3.1.2.2 平成27年度「英語教育実施状況調査」の結果と本研究の結果の関係.....	63
3.2 研究課題2の分析結果.....	66
3.3 理念と実践の関連性.....	71
4. 調査のまとめ.....	74
5. 教員の意識はどう変わったかー調査を終えて.....	75
引用文献.....	77
執筆協力者.....	77
添付ファイル資料.....	77

1. 研究目的

学習指導要領は小学校や中学校、高等学校等で教える内容を定めたものであり、これをもとに教科書等が作成され、現場での教育が日々実践されている。また、大学における教職課程科目のシラバスでは、テキストもしくは参考資料として学習指導要領を明記することが定められており、学校教育において学習指導要領が中核的な役割を果たしている。しかし、教員研修等で非公式に確認した限りでは、一旦教育現場に出ると学習指導要領をきちんと読んだことがないというのが大半を占めているとの報告をよく耳にする。このようなことも踏まえ、吉田他(2004)では中学校と高等学校の英語教員による英語の学習指導要領の内容の理解と実践についてアンケート調査で分析し、1) 学習指導要領に書いてある理念を理解しながらも、それを実際の指導で実践できていないこと、2) 教員研修や受験に対する意識が学習指導要領に書いてある理念の理解や実際の指導に大きな影響を与えていること、等を報告した。このような傾向は Gorsuch(2001)でも報告されており、英語の学習指導要領に書かれている内容の理解と実践の間にはギャップがあるようである。しかし、これらの調査のように英語の学習指導要領の理解や実践に関する包括的な調査研究は少なく、多くの場合は英語の学習指導要領に書かれている特定の項目についての実践報告の形を取っている。そこで、吉田他(2004)から 10 年以上経過し、その間、学習指導要領の改訂が行われたこともあり、英語の「新」学習指導要領の内容の理解と実践についての現職の中学校および高等学校の英語教員の意識と、吉田他(2004)以降の英語教員の学習指導要領の内容の理解と実践に関する意識の変容を把握することを本研究の主目的とし、以下のように研究課題を設定した：

研究課題1: 英語の学習指導要領に明記されている英語教育の理念や目的および言語活動の実践に関して中学校および高等学校の英語教員がどのような意識を持っているか

研究課題2: 英語の学習指導要領に明記されている英語教育の理念や目的および言語活動の実践に関する中学校および高等学校の英語教員の意識がどのように変化しているか

2. 研究方法

本研究では、英語の学習指導要領の内容の理解と実践に関する英語教員の意識をより広く収集するために、アンケート調査を実施した。本アンケートの内容は表1に示す通りである。

表1. アンケートの詳細

パート	内容	対象	項目番号	前回との共通項目番号
1	回答者の個人特性	中高共通	1-21	
2	中学校・高等学校の英語教員の英語教育の理念や目的への賛成度	中高共通	22-47	22-26, 30, 32-38 (24-25 は微修正)
3	アンケート選択用項目	中高共通	48	
4	中学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度	中学校	49-73	49-63 (51-52 は微修正)
5	高等学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度	高等学校	74-108	74-76, 78, 79, 82, 83, 87, 94, 97, 99, 100 (100 は微修正)
6	中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の重要度	中高共通	109-115	
7	中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度および理由	中高共通	116-136	

まず、パート1の「回答者の個人特性」については中学校と高等学校の教員対象の共通項目で、大別して、1)年齢、2)性別、3)英語教員歴、4)過去5年間の各種の英語教員研修経験や受講回数、5)本務校の特性、6)現在施行されている学習指導要領の内容を知っているかどうか、7)過去3年間の担当内容、に関する21問から構成されている。パート2の「中学校・高等学校の英語教員の英語教育の理念や目的への賛成度」は経年比較のために使用する前回実施した13問を含む26問である。パート3の項目48は「アンケート選択用項目」であり、「中学校の授業」を選んだ回答者はパート4の項目のみを、「高等学校の授業」を選んだ回答者はパート5の項目のみを、「中学校、高等学校の授業」を選んだ回答者はパート4と5の両方の項目に回答していただいた。パート4は「中学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度」に関するもので、経年比較のために使用する前回実施した15問を含む25問である。パート5は経年比較のために使用する前回実施した12問を含む「高等学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度」に関する35問からそれぞれ構成されている。パート6は「中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の重要度」に関する中学校と高等学校両方の教員対象の共通項目12問である。パート7は「中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度および理由」に関する中学校と高等学校両方の教員対象の共通項目で、実施度に関する問題に「ときどき行っている」もしくは「常に行っている」と回答した場合は行っている理由を答える問題に、「全く行っていない」もしくは「あまり行っていない」と回答した場合は行っていない理由を答える問題に進んでそれぞれの理由を回答していただいた。このパートの問題は、実施度に関する問題と行っている理由に関する問題と行っていない理由に関する問題が1セットとなり、計5セットで15問から成っている。

パート1以外の問題の作成方法についてであるが、パート1については『今後の英語教育の改善・充実方

策について『報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』(文部科学省, 2014)をもとに、それ以降のパートは現行の学習指導要領をもとに、それぞれ新しい問題を作成した。パート2・4・5で使われた前回調査との共通項目は、前回調査で判明した因子を構成する項目の中から因子得点の高い項目を選択して作成した。本アンケートはインターネット上で実施や集計をするために SurveyMonkey®を利用してインターネット上 (<https://jp.surveymonkey.com/r/MX5JBWW>) で回答ができるように設定した。

上記のアンケートを使った調査への協力依頼は2段階で行われた。まず、初めに、2015年6月下旬から英語教育関連のメーリングリストや個人的にメールで回答協力依頼を出し、8月までの約2カ月間に163件の回答を得た。その後、同年9月下旬に中学校、高等学校あわせて1297校にアンケート調査への回答協力依頼状を郵送し、翌月に175件の回答を得た。収集したデータ338件を精査した後、最終的に271件をデータ分析の対象とした。

3. 調査結果

3.1 研究課題 1 の分析結果

3.1.1 項目毎の分析結果

3.1.1.1 回答者の特性

表 2. 【項目 1】「年齢」の記述統計

年齢	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	全回答者
回答者数	41 人	73 人	62 人	84 人	11 人	271 人
全体に占める割合	15.1%	26.9%	22.9%	31.0%	4.1%	100%

日本全体での教員の年齢構成と同様、「40 代」以上が半数を占める。中でも「50 代」が最も多い。しかし、「20 代」、「30 代」の教員の割合も全体と比べて高い数値である。

表 3. 【項目 2】「性別」の記述統計

性別	男性	女性	全回答者
回答者数	147 人	124 人	271 人
全体に占める割合	54.2%	45.8%	100%

男女ほぼ半々で、公立と私立で比べた場合も男女比はほぼ同じである。中学校勤務の回答者は 1 割ほど女性の方が多。女性の回答者の平均年齢は男性より若い。

表 4. 【項目 3】「英語教員歴」の記述統計

年数	5 年以下	6～10 年	11～15 年	16～20 年	21 年以上	全回答者
回答者数	49 人	43 人	47 人	33 人	99 人	271 人
全体に占める割合	18.0%	15.8%	17.3%	12.1%	36.5%	100%

教員歴「21 年以上」の教員が最も多い。その他の年代ではパーセンテージにあまり開きがない。高校と中学で比べると、中学校勤務の回答者は全体的に若く、特に教員歴 6～10 年以上の割合が全体の倍近くある。

表 5. 【項目 4】「過去 5 年間英語教員研修受講経験」の記述統計

受講経験の有無	ある	ない	全回答者
回答者数	224 人	47 人	271 人
全体に占める割合	82.6%	17.3%	100%

80%以上が過去 5 年以内に研修の受講経験が「ある」と回答した。関東圏、高校・中高一貫、いわゆる受験校

勤務の回答者が多いことが要因としていられると考えられる。公立・私立で比較した場合、公立が若干多いもののほとんど同じ割合である。また、項目 14 で表されているとおり、首都圏と愛知、大阪などの大都市圏勤務の回答者が多いことから、研修会場へのアクセスが要因である可能性がある。

表 6. 【項目 5】「過去 5 年間の国による英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	19 人	11 人	3 人	6 人	38 人	194 人	271 人
全体に占める割合	7.0%	4.1%	1.1%	2.2%	14.0%	71.6%	100%

80%以上の教員が研修を受けている一方で、国によって供給される研修に参加する教員は少なく71.6%の回答者が「受講なし」と答えている。しかし、研修を受けていると回答した回答者の中では受講回数「5 回以上」が最も多い。受講する教員は継続して複数回受講する傾向がある。

表 7. 【項目 6】「過去 5 年間の都道府県委による英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	42 人	17 人	17 人	2 人	52 人	141 人	271 人
全体に占める割合	15.5%	6.3%	6.3%	0.7%	19.2%	52.0%	100%

表 6 の国による研修の受講経験者は多かったが、表7にあるように都道府県委による英語教員研修の受講回数については、半数以上が「受講なし」と回答している。国による研修と同様、受講経験者のなかでは「5 回以上」の受講経験がある回答者が最も多く、次に多いのが「1 回」であった。公立、私立で比較した場合、1 回・2 回と答えた回答者の半数近くが私立校勤務であるが、参加回数が上がるにつれその割合は低くなる。また、中学校勤務の回答者は5回以上参加する割合が高い。

表 8. 【項目 7】「過去 5 年間の市町村委による英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	4 人	4 人	5 人	2 人	27 人	229 人	271 人
全体に占める割合	1.5%	1.5%	1.8%	0.7%	10.0%	84.5%	100%

80%以上の回答者が「受講なし」と回答しており、全体的に見ても、都道府県による研修以上に受講経験者が少ない。ほとんどの参加者が公立校勤務である。また、中学校勤務の回答者は半数近くが1度は参加しており、参加回数 5 回以上の回答者の 3 分の 2 が中学校勤務である。市町村レベルでは公立の中学校向けの研修が多く提供されている可能性がある。

表 9. 【項目 8】「過去 5 年間の中英研・高英研による英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	20 人	20 人	16 人	14 人	43 人	158 人	271 人
全体に占める割合	7.4%	7.4%	5.9%	5.2%	15.9%	58.3%	100%

半数以上が「受講なし」と回答している。参加経験者のほとんどが公立校勤務であるが、1 回のみ参加に限り私立校勤務が半数を占める。継続的参加への動機づけは公立校勤務の教員に対し行われているようだ。たとえば、自治体によっては参加を義務付けられる、勤務校から出席を義務付けられているなどの可能性が考えられる。

表 10. 【項目 9】「過去 5 年間の学会の参加回数」の記述統計

参加回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	16 人	11 人	14 人	5 人	60 人	165 人	271 人
全体に占める割合	5.9%	4.1%	5.2%	1.8%	22.1%	60.9%	100%

研修に関する設問と同様、6 割を占める「受講なし」以外では、「5 回以上」が約 2 割と最も多く、学会へ参加している教員の参加頻度は多い。また、学会参加「5 回以上」の回答者は他の研修にも複数回参加している。区分、校種、受験への意識による違いは見られなかったが、男女で見ると、受講経験者に差はないものの、5 回以上の受講者は男性の方が継続して参加する傾向がある。男性教員の教員歴が高めであることも関係しているかもしれない。

表 11. 【項目 10】「過去 5 年間の民間企業による英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	28 人	31 人	28 人	8 人	76 人	100 人	271 人
全体に占める割合	10.3%	11.4%	10.3%	3.0%	28.0%	36.9%	100%

国・都道府県の公的な団体による研修以上に受講経験者が多い。他の研修と同様に「5 回以上」の参加経験がある層が最も多いものの、特に 1～3 回のみ受講者数が比較的多い。学校区分による大きな違いは見られないが、高校勤務の回答者で 5 回以上の参加が比較的多い一方、中学校では割合が少ない。また、項目 11 と同様に私学の教員の受講回数が多い。

表 12. 【項目 11】「過去 5 年間の私的な英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	28 人	21 人	20 人	7 人	94 人	101 人	271 人
全体に占める割合	10.3%	7.8%	7.4%	2.6%	34.7%	37.2%	100%

公的機関や企業と比べて最も受講者が多い。しかし、中学校勤務の回答者は受講なしの割合が大きい。私的

な研修、民間企業による研修より、県や市町村による研修に参加する傾向があるようだ。

表 13. 【項目 12】「過去 5 年間の海外での英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	25 人	8 人	4 人	3 人	0 人	231 人	271 人
全体に占める割合	9.2%	3.0%	1.5%	1.1%	0%	85.2%	100%

8 割以上の回答者が「受講なし」と回答した。また、他のタイプの英語教員研修と比較すると、全体的に受講回数が少ないことと「5 回以上」と答えた回答者がいないのが特徴的である。

表 14. 【項目 13】「過去 5 年間の上記以外の英語教員研修の受講回数」の記述統計

受講回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	受講なし	全回答者
回答者数	14 人	6 人	4 人	3 人	32 人	212 人	271 人
全体に占める割合	5.2%	2.2%	1.5%	1.1%	11.8%	78.2%	100%

他の研修と比べ全体的に参加者は少なく、男女で比べた場合、女性の方が受講する割合が高い。

表 15. 【項目 14】「現在の本務校の所在地(都道府県名)」の記述統計

所在地	回答者数	全体に占める割合	所在地	回答者数	全体に占める割合	所在地	回答者数	全体に占める割合
北海道	8 人	3.0%	石川県	0 人	0.0%	岡山県	1 人	0.4%
青森県	2 人	0.7%	福井県	2 人	0.7%	広島県	1 人	0.4%
岩手県	1 人	0.4%	山梨県	5 人	1.8%	山口県	1 人	0.4%
宮城県	3 人	1.1%	長野県	12 人	4.4%	徳島県	4 人	1.5%
秋田県	0 人	0.0%	岐阜県	3 人	1.1%	香川県	2 人	0.7%
山形県	0 人	0.0%	静岡県	4 人	1.5%	愛媛県	1 人	0.4%
福島県	2 人	0.7%	愛知県	8 人	3.0%	高知県	1 人	0.4%
茨城県	6 人	2.2%	三重県	1 人	0.4%	福岡県	6 人	2.2%
栃木県	3 人	1.1%	滋賀県	0 人	0.0%	佐賀県	0 人	0.0%
群馬県	3 人	1.1%	京都府	2 人	0.7%	長崎県	1 人	0.4%
埼玉県	28 人	10.3%	大阪府	21 人	7.7%	熊本県	1 人	0.4%
千葉県	13 人	4.8%	兵庫県	5 人	1.8%	大分県	2 人	0.7%
東京都	59 人	21.8%	奈良県	4 人	1.5%	宮崎県	3 人	1.1%
神奈川県	29 人	10.7%	和歌山県	4 人	1.5%	鹿児島県	2 人	0.7%
新潟県	3 人	1.1%	鳥取県	0 人	0.0%	沖縄県	3 人	1.1%
富山県	7 人	2.6%	島根県	4 人	1.5%	全回答者	271 人	100.0%

全国で見ると、東京都の回答者が最も多く、次いで神奈川県・埼玉の回答者が多い。これら 3 県に千葉を加えた

首都圏で全体の47.6%を占めている。その他では、大阪・愛知・福岡などの地方の大都市圏での回答者が多い。一方、九州・東北・北関東・山陰の回答者は少なく、回答者ゼロの都道府県もある。東京以外は公立と私立の回答者の割合がほとんど同じである一方、東京は回答者 74 人中 55 人が私立校勤務である。

表 16. 【項目 15】「現在の本務校の区分」の記述統計

本務校の区分	国立	公立	私立	全回答者
回答者数	8 人	125 人	138 人	271 人
全体に占める割合	3.0%	46.1%	50.9%	100%

国立と公立をあわせると私立とほぼ同数となっている。

表 17. 【項目 16】「現在の本務校の校種」の記述統計

本務校の校種	小学校	中学校	高等学校	小中一貫校	中高一貫校	全回答者
回答者数	3 人	40 人	113 人	2 人	113 人	271 人
全体に占める割合	1.1%	14.8%	41.7%	0.7%	41.7%	100%

高等学校と中高一貫校が最も多い。一方で、小学校の教員は約 1%に留まる。中高・小中一貫校以外の回答者のうち多くが3年間継続して同じ校種で勤務している。関東圏の高等学校勤務の 40 代と 50 代の教員がボリュームゾーンである。また中高一貫校勤務が全体に占める割合が高いが、そのうちの大多数が私立である。中学校は約7割が公立であるが、今後公立でも中高一貫が増えてくるとされる。

表 18. 【項目 17】「現在施行されている学習指導要領の内容を知っていますか。」の記述統計

知識の有無	はい	いいえ	全回答者
回答者数	254 人	17 人	271 人
全体に占める割合	93.7%	6.3%	100%

9割以上の回答者が「はい」と回答している。回答者の8割が過去五年間に教員研修に参加したことがあると言っている(項目 4)ことと合わせても、関心は高いことがうかがえる。

表 19. 【項目 18】「過去 3 年間でご担当経験のある学年(複数回答可)」の記述統計

担当経験のある学年	小学校	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	高 3	全回答者
回答者数	8 人	79 人	84 人	88 人	186 人	201 人	194 人	271 人
全体に占める割合	3.0%	29.2%	31.0%	32.5%	68.6%	74.2%	71.6%	100%

全回答者のうち約7割の回答者が高等学校のそれぞれの学年で過去 3 年間に担当経験がある一方、中学校

で各学年の担当経験は約 3 割程度であった。さらに、小学校での担当経験がある回答者は 3%でかなり低い割合である。そのため、本調査の小学校との教育連携等の回答に関しては、小学校における教育実践の知識の薄さや経験がないことによる影響も考えられうる。

表 20. 【項目 19】「現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識」の高さの記述統計

学校としての意識	高い	どちらかと言えば 高い	どちらかと言えば 低い	低い	全回答者
回答者数	120 人	86 人	46 人	19 人	271 人
全体に占める割合	44.3%	31.7%	17.0%	7.0%	100%

7 割以上の回答者が受験勉強への意識が「高い」もしくは「どちらかと言えば高い」学校に勤めている。その中でも「高い」の割合は「どちらかといえば高い」の割合より 10%程度上回っている。回答者の 4 割が私立の一貫校であることが原因の一つだと考えられる。また、校内でどのコース(進学コース、国際科、英語コースなど)を教えているかによっても意識が違う可能性がある。

表 21. 【項目 20】「過去 3 年間の担当クラスの平均生徒数」の記述統計

平均生徒数	20 人未満	20 人以上	全回答者
回答者数	16 人	255 人	271 人
全体に占める割合	5.9%	94.0%	100%

クラスの平均人数が「20 人以上」の受け持ちが9割 4 分を占めている。

表 22. 【項目 21】「過去 3 年間にチームティーチングの経験がありますか」の記述統計

経験の有無	ある	ない	全回答者
回答者数	192 人	79 人	271 人
全体に占める割合	70.8%	29.2%	100%

約 7 割の回答者が過去 3 年間にチームティーチングの経験が「ある」と回答している。

3.1.1.2 中学校・高等学校の英語教員の英語教育の理念や目的への賛成度

表 23. 【項目 22】「実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	22 人	63 人	44 人	112 人	30 人	271 人
全体に占める割合	8.1%	23.2%	16.2%	41.3%	11.1%	100%

半数以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しているが、「全く賛成である」は回答者の約 10%にすぎない。「あまり賛成できない」、「どちらともいえない」、「ある程度賛成である」の中間層が全体の 8 割を占めている。

表 24. 【項目 23】「実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけではなく、読み、書く能力もさす」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	1 人	7 人	7 人	82 人	174 人	271 人
全体に占める割合	0.4%	2.6%	2.6%	30.3%	64.2%	100%

9 割以上の回答者が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しており、さらに「全く賛成である」は回答者の約 65%に上っている。高校の学習指導要領では「外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図ることができる能力である。すなわち、外国語を使って、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりして、通じ合うことができる能力」と定義されている。一方では半数以上が項目 22 でコミュニケーション能力とは主に聞き話す能力であると答えていた。項目 22 でも半数が賛成と答えていることから、4 技能が必要であると考えつつ、聞き話す能力に重きを置いている可能性がある。

表 25. 【項目 24】「海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	5 人	30 人	28 人	110 人	98 人	271 人
全体に占める割合	1.8%	11.1%	10.3%	40.6%	36.2%	100%

4 分の 3 以上の回答者が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しており、最も多かったのは「ある程度賛成である」とした回答者(40.6%)であった。

表 26. 【項目 25】「国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の育成が必要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	4 人	4 人	9 人	85 人	169 人	271 人
全体に占める割合	1.5%	1.5%	3.3%	31.4%	62.4%	100%

全回答者の 9 割以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しており、さらに「まったく賛成である」と答えた割合は 6 割強である。これに対して、「全く賛成できない」と「あまり賛成できない」の回答者は合わせても約 3%のみであった。

表 27. 【項目 26】「英語を実践的に使うことが出来なければ日本及び日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	16 人	20 人	52 人	115 人	68 人	271 人
全体に占める割合	5.9%	7.4%	19.2%	42.4%	25.1%	100%

全回答者の 67.5%が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。しかし、「全く賛成である」は全体の 4 分の 1 程度に留まり、一方、「ある程度賛成である」が全体の中で最も多く、約 4 割を占めている。

表 28. 【項目 27】「グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	7 人	7 人	25 人	118 人	114 人	271 人
全体に占める割合	2.6%	2.6%	9.2%	43.5%	42.1%	100%

「(全く・ある程度)賛成である」と回答した教員は全体の 8 割に上り、かなり賛成度が高いといえる。「ある程度賛成である」(43.5%)が最も多いが、「全く賛成である」(42.1%)も 40%を超えている。この「全く賛成である」という回答は、6 割程度がそのように回答した項目 25 ほどは多くなかったが、25.1%に留まった項目 26 よりも多い。

表 29. 【項目 28】「小学校においても、より体系的に英語を指導すべきである」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	27 人	50 人	57 人	92 人	45 人	271 人
全体に占める割合	10.0%	18.5%	21.0%	33.9%	16.6%	100%

「ある程度賛成である」が最も多く、小学校から上がってくる中学生を指導する先生も高校の先生も同様の傾向を示している。「あまり賛成できない」「どちらともいえない」「全く賛成である」がともに 20%前後であり回答にばらつきがみられ、小学校英語に関しては信条に個人差が大きい可能性を示唆している。

表 30. 【項目 29】「小学校・中学校は、連携して相互乗り入れ授業、カリキュラムづくり、指導計画作成などを行う合同研修などを行うべきである」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	13 人	17 人	37 人	116 人	88 人	271 人
全体に占める割合	4.8%	6.3%	13.7%	42.8%	32.5%	100%

7 割以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しており、小中連携の必要性を感じている回答者が多い。項目 28・29 ともに中立的な回答が多い。回答者の多くが小学校勤務経験をもたないため明確なスタンスを取るだけの判断材料がない可能性がある。これもまた、中学校の先生と高校の先生との間の違いを見た方がいいかもしれない。

表 31. 【項目 30】「中学校卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	7 人	16 人	26 人	136 人	86 人	271 人
全体に占める割合	2.6%	5.9%	9.6%	50.2%	31.7%	100%

「(全く・ある程度)賛成である」と回答した割合が 8 割を超えている。さらに、半数以上が「ある程度賛成である」と回答している。

表 32. 【項目 31】「中学校においては、生徒が英語に触れる機会を充実させるために、生徒の理解の程度に応じて、授業は基本的に英語で行うべきである」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	12 人	43 人	62 人	100 人	54 人	271 人
全体に占める割合	4.4%	15.9%	22.9%	36.9%	19.9%	100%

5 割以上が「(全く・ある程度)賛成である」と答えている一方で、2 割が「どちらともいえない」と回答している。高校勤務の教員が多いことから中学の実情がわからないなどの要因が考えられる。

表 33. 【項目 32】「高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話したりできなければならない」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	10 人	7 人	36 人	144 人	74 人	271 人
全体に占める割合	3.7%	2.6%	13.3%	53.1%	27.3%	100%

8 割近くの回答者が「(全く・ある程度) 賛成である」と答えている。そのなかでも全体の 53%が「ある程度賛成である」と回答している。

表 34. 【項目 33】「高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	11 人	5 人	35 人	148 人	72 人	271 人
全体に占める割合	4.1%	1.8%	12.9%	54.6%	26.6%	100%

項目 32 と項目 33 の回答が似ていることから 4 技能を満遍なく育成すべきだというビリーフがあるといえる。また、この傾向は項目 22、項目 23 での回答と合わせて解釈するに、やはりどれか特定の技能のみならず、4 つの技能に対する意識を示唆するものと考えられる。

表 35. 【項目 34】「英語を入試などのテストに合格するために指導することは重要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	7 人	34 人	37 人	143 人	50 人	271 人
全体に占める割合	2.6%	12.5%	13.7%	52.8%	18.5%	100%

賛成の回答が多いものの、「全く賛成である」と答えた回答者は 2 割未満である。半数以上の人は「ある程度賛成である」と答えている。項目 19 と同様受験に対する意識の高さがうかがえる。私立の中高一貫校勤務の教員が多いことが一因ではないか。校種との関連など分析の必要性がある。項目 19 では 4 割が受験勉強に対する意識が高いとしている一方、項目 34 では「まったく賛成」は 18.5%に留まり、「ある程度賛成」が半数である。受験に対する意識を高く持ちつつ、それ以外を排除しない姿勢がみられる。あるいは、「全く賛成である」が少ないことから、否が応でも受験を意識せざるを得ない現状があると解釈することもできる。

表 36. 【項目 35】「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	4 人	1 人	13 人	62 人	191 人	271 人
全体に占める割合	1.5%	0.4%	4.8%	22.9%	70.5%	100%

全体の 9 割以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。そのなかでも、7 割近くの回答者が「全く賛成である」と答えている。

表 37. 【項目 36】「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	4 人	1 人	6 人	66 人	194 人	271 人
全体に占める割合	1.5%	0.4%	2.2%	24.4%	71.6%	100%

7 割が「全く賛成である」と答えている。95%の回答者が「賛成である」と答えている。「全く賛成できない」「あまり賛成できない」の回答者数は項目 35 と同じである。項目 35、項目 36 ともに 7 割近くが全く賛成であると答えており、生徒のモチベーションへの関心の高さがうかがえる。項目 117、項目 120、項目 123、項目 126 で、話し手、書き手の意向を理解させる、自分の考えを話させる、書かせるなどの活動を行っている理由として、生徒が興味関心を示すことを一番の理由として挙げている。教師のビリーフのほか、生徒の興味・関心の有無に指導が左右されている可能性がある。

表 38. 【項目 37】「英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	2 人	2 人	10 人	60 人	197 人	271 人
全体に占める割合	0.7%	0.7%	3.7%	22.1%	72.7%	100%

9 割以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。特に「全く賛成である」の全体に占める割合は 7 割を超えている。

表 39. 【項目 38】「英語を学ぶことにより、生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	4 人	15 人	58 人	124 人	70 人	271 人
全体に占める割合	1.5%	5.5%	21.4%	45.8%	25.8%	100%

「ある程度賛成である」は半数近い回答者が賛同している。しかし「全く賛成である」が 25.8%にとどまっている。

表 40. 【項目 39】「小・中・高を通じて、「英語を使って何ができるか」という観点から一貫した教育目標が必要であ

る」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	5人	5人	21人	110人	130人	271人
全体に占める割合	1.8%	1.8%	7.7%	40.6%	48.0%	100%

88%以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しており、Can-Do リストの活用等に対しての受容的な素地があることをうかがわせる結果となっている。詳細に関しては「ある程度賛成」と「全く賛成である」で半分に分かれている。

表 41. 【項目 40】「英語の授業においては、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	2人	7人	20人	102人	140人	271人
全体に占める割合	0.7%	2.6%	7.4%	37.6%	51.7%	100%

9割近くが「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。さらに、「全く賛成である」という回答は半数を超えている。

表 42. 【項目 41】「4技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、学習到達目標を設定し、指導・評価方法を改善すべきである」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	5人	4人	27人	108人	127人	271人
全体に占める割合	1.8%	1.5%	10.0%	39.9%	46.9%	100%

85%以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。「ある程度賛成である」が39.9%、「全く賛成である」が46.9%で、両者の差は7%であり、表41の【項目40】の結果に見られる差の半分程度となっている。

表 43. 【項目 42】「主体的な学びにつながる「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を重視し、多面的な評価方法等を検証・活用すべきである」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	3人	12人	35人	117人	104人	271人
全体に占める割合	1.1%	4.4%	12.9%	43.2%	38.4%	100%

回答全体の8割が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しており、その中で「ある程度賛成である」とした回答は

半数強の 4 割程度を占めている。これはコミュニケーションへの関心・意欲・態度の「評価」に関するものだが、表 37 の【項目 36】の「指導」に関する回答では、約 95%が「(全く・ある程度)賛成である」と回答しており、その中で「全く賛成である」とした回答は 7 割程度を占めている。関心・意欲は指導において重要視されているものの、評価対象としてはそれほど重きをおかれていない可能性がある。

表 44. 【項目 43】「入学者選抜における英語力の測定は、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	7 人	7 人	51 人	118 人	88 人	271 人
全体に占める割合	2.6%	2.6%	18.8%	43.5%	32.5%	100%

7 割以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。しかし、「ある程度賛成である」が 43.5%と「全く賛成である」より多い。

表 45. 【項目 44】「国において音声や映像を含めた、デジタル教科書・教材を導入すべきである」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	6 人	14 人	67 人	110 人	74 人	271 人
全体に占める割合	2.2%	5.2%	24.7%	40.6%	27.3%	100%

半数以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している一方、回答者の 4 人に 1 人が「どちらともいえない」を選んでいる。また、「全く賛成である」と「全く賛成できない」を除いた 7 割近くが明確なスタンスをとることを避けている。デジタル教材に対する意識に対しては、40 代と 50 代がボリュームゾーンであり、彼らが IT に対してさほど抵抗感を持っていないようである。また、男女比がほぼ半々であることがこの結果に反映されている可能性もある。

表 46. 【項目 45】「大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善が必要である」への賛成度

賛成度	全く 賛成できない	あまり 賛成できない	どちらとも いえない	ある程度 賛成である	全く 賛成である	全回答者
回答者数	4 人	3 人	37 人	80 人	147 人	271 人
全体に占める割合	1.5%	1.1%	13.7%	29.5%	54.2%	100%

8 割を超える回答者が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。多くの現役教員が教員養成課程でのカリキュラムの開発・改善が必要であると考えている。

表 47. 【項目 46】「小学校の専科指導や中・高等学校の言語活動の高度化に対応した現職教員の研修を実施すべきである」への賛成度

賛成度	全く賛成できない	あまり賛成できない	どちらともいえない	ある程度賛成である	全く賛成である	全回答者
回答者数	5人	8人	23人	105人	130人	271人
全体に占める割合	1.8%	3.0%	8.5%	38.7%	48.0%	100%

9割以上が「(全く・ある程度)賛成である」と回答している。多くの教員が、より高度な教師教育や研修の必要性を感じているといえる。これは項目 45 とも共通した傾向であり、変化する教育現場への対応を望む声であると考えられる。

表 48. 【項目 47】「英語教育においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成するべきである」への賛成度

賛成度	全く賛成できない	あまり賛成できない	どちらともいえない	ある程度賛成である	全く賛成である	全回答者
回答者数	2人	5人	15人	116人	133人	271人
全体に占める割合	0.7%	1.8%	5.5%	42.8%	49.1%	100%

半数近くが「全く賛成である」を選んでいる。「ある程度賛成である」と合わせて 90%を超える回答者が賛成している。項目 45・46 を受け、教員養成におけるカリキュラムの開発・改善が必要と考えている教員の比率と、現職教員の研修の実施が必要と考えている教員の比率は、その構成がほとんど同じである。教員養成の重要性を意識した回答と捉えることができる。また、項目 47 から英語教育で培うべき能力に関しては、指導要領の内容に沿ったものを理想としていうことも分かる。

表 49. 「全く賛成である」の回答率を基準とした賛成度が上位 5 位までの項目

順位	項目	%
1	【項目 37】「英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である」	72.7
2	【項目 36】「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」	71.6
3	【項目 35】「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」	70.5
4	【項目 23】「実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけではなく、読み、書く能力もさす」	64.2
5	【項目 25】「国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の育成が必要である」	62.4

上位 3 項目は指導に関するもので、生徒の視野を広げたり、英語への好意的な態度を育成したりすることを目的とすることの賛成度が最も高かったようである。【項目 23】がそれに続いているが、「実践的コミュニケーション能力」が 2 技能で留まることなく 4 技能に亘るという意識が広まっていることが明らかになった。【項目 25】が高いことから、グローバル化に伴った国際社会というものを念頭に置いた英語教育に賛同を得ている様子が伺える。

表 50. 「全く賛成できない」の回答率を基準とした賛成度が下位 5 位までの項目

順位	項目	%
1	【項目 28】「小学校においても、より体系的に英語を指導すべきである」	10.0

2	【項目 22】「実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう」	8.1
3	【項目 26】「英語を実践的に使うことが出来なければ日本及び日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう」	5.9
4	【項目 29】「小学校・中学校は、連携して相互乗り入れ授業、カリキュラムづくり、指導計画作成などを行う合同研修などを行うべきである」	4.8
5	【項目 31】「中学校においては、生徒が英語に触れる機会を充実させるために、生徒の理解の程度に応じて、授業は基本的に英語で行うべきである」	4.4

【項目 28】と【項目 29】は小学校での英語教育に関連する項目であり、小学校に外国語活動が導入されている今日においても小学校での英語教育の改善に対して「全く賛成できない」とする意見が比較的多いことが判明した。【項目 22】の「実践的コミュニケーション能力」がオーラルの 2 技能に該当するという考えに「全く賛成できない」という回答が多いのは、表 49 に見られるように、【項目 23】「実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけではなく、読み、書く能力もさす」という考えが広まったためだと思われる。【項目 26】に「全く賛成できない」とする意見があることに対しては、様々な解釈が想定しうるが、「国際社会で取り残されてしまう」という否定的な推測に対する意見のようにも取ることができるかもしれない。【項目 31】に関しては、「授業は基本的に英語で行うべきである」の部分に「全く賛成できない」という意見のように思われるが、高校ではすでに実施されているものの、中学での実施の際にはこのような意見にも参考にした上で研修等での普及を促進していただきたい。

3.1.1.3 アンケート選択用項目

表 51. 【項目 48】「過去 3 年間に教えたことのある授業を選択肢の中から一つ選んでお答えください」の記述統計

授業の種類	中学校の授業	高等学校の授業	中学校、高等学校の授業	全回答者
回答者数	45 人	145 人	81 人	271 人
全体に占める割合	16.6%	53.5%	29.9%	100%

全体の半数以上が「高等学校の授業」を担当している教員であり、中高一貫校の教員を含めると高校の授業を担当している教員は更に多いことが分かる。

3.1.1.4 中学校の英語教員の英語の活動や指導の実践度

表 52. 【項目 49】「実際に英語を使用してお互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行わせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	8 人	7 人	72 人	39 人	126 人
全体に占める割合	6.3%	5.6%	57.1%	31.0%	100%

約 9 割が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。しかし、その中の約 6 割は「時々行っている」教員である。「(全く・ほとんど)行っていない」教員は 11.9%と少ないものの、「かなり頻繁に行っている」教員も 31%とあまり多くはない。行っていないわけではないという教員が多いのが現状であると言える。

表 53. 【項目 50】「文法事項の取り扱いについては、用語や用法の区別などを理解するだけでなく、実際に使わせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	5 人	9 人	51 人	61 人	126 人
全体に占める割合	4.0%	7.1%	40.5%	48.4%	100%

約 9 割が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。また、5 割以上の教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。文法用語の区別のみにとどまる教員は少なく、実際に活用させている現状が伺える。

表 54. 【項目 51】「生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用して指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	17 人	37 人	44 人	28 人	126 人
全体に占める割合	13.5%	29.4%	34.9%	22.2%	100%

約 6 割が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。しかし、その中で「かなり頻繁に行っている」教員は約 2 割である。ICT の充実に関しては、回答が分かれた。ICT やデジタル教科書・教材について肯定的な年代は、60代の教員が多く、否定的な年代は若年層の教員に傾いていた。今後の対策として、肯定的・否定的であると考えられる原因を追求するとともに、男女の比率も分析することにより、どのように課外研修や現職教育等で学校全体が ICT 教育に取り組んでいくべきかについての基盤づくりができることが期待される。

表 55. 【項目 52】「学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れて指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	4 人	4 人	35 人	83 人	126 人
全体に占める割合	3.2%	3.2%	27.8%	65.9%	100%

約 94%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答し、その中でも「かなり頻繁に行っている」教員は 65%を超える。ペアワーク・グループワーク活動が広く浸透している現状が伺える。

表 56. 【項目 53】「伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	12 人	30 人	67 人	17 人	126 人
全体に占める割合	9.5%	23.8%	53.2%	13.5%	100%

約 65%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、その中で全体の約 5 割の教員が「時々行っている」と回答している。

表 57. 【項目 54】「聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	13 人	40 人	53 人	20 人	126 人
全体に占める割合	10.3%	31.7%	42.1%	15.9%	100%

半数以上の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」が、そのうちのほとんどが「時々行っている」と答えていることがわかった。項目 53・54 から「書く」活動については、実践していない教員も一定程度(3~4 割)いる現状が伺える。

表 58. 【項目 55】「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ教材を使う」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	9 人	36 人	66 人	15 人	126 人
全体に占める割合	7.1%	28.6%	52.4%	11.9%	100%

約 6 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、その中で全体の約 5 割は「時々行っている」と回答しており、「かなり頻繁に行っている」教員は約 1 割と少ない。つまり、意識はしているものの重要

性の認識が未だに薄いということが考えられる。

表 59. 【項目 56】「世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つ教材を使う」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	7 人	31 人	64 人	24 人	126 人
全体に占める割合	5.6%	24.6%	50.8%	19.0%	100%

約 7 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、その中の 5 割を超える教員が「時々行っている」と回答している。項目 55・56 から、教材に関しては、6～7 割の教員が多様性・文化について意識したものを使用(選定)していることが分かる。ただし、その大半が「時々行っている」という回答のため、常にそのような教材を使用しているわけではないことが伺える。

表 60. 【項目 57】「言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	2 人	6 人	54 人	64 人	126 人
全体に占める割合	1.6 %	4.8 %	42.9 %	50.8 %	100%

約 95%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しており、その中で「時々行っている」と回答した教員は約 4 割、「かなり頻繁に行っている」と回答した教員は約 5 割である。ほとんどの教員が文法事項の指導を行っており、過半数がそれに積極的である。項目 70 でも文法指導に肯定的な意見が多くみられ、この傾向は高校教員の文法項目指導に関する項目 79 でも同様のようである。文法指導に手厚い理由として、年代や海外研修の少なさが影響していることも考えられる。今後さらなる分析が求められる。

表 61. 【項目 58】「強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れさせ、正しく発音させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	1 人	8 人	47 人	70 人	126 人
全体に占める割合	0.8%	6.3%	37.3%	55.6%	100%

約 95%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しており、その中の 6 割近くの教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。「全く行っていない」と回答している教員は 1 人のみで、ほとんどの教員が音声面の指導を行っており、過半数はそれに積極的である。この項目に関する指導が手厚い理由として、音読の重視や音声指導は早めにと、臨界期におけるピループが関連していることが予想される。また、項目 72 と合わせてみても、音声指導が手厚いことが伺える。高校教員の音声指導に関する項目 86・100 の結果を見ても手厚い様子が

継続しているのが分かる。

表 62. 【項目 59】「文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書かせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	1 人	18 人	61 人	46 人	126 人
全体に占める割合	0.8%	14.3%	48.4%	36.5%	100%

約 85%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しており、「かなり頻繁に行っている」教員は 4 割に上る。「全く行っていない」と回答している教員は 1 名のみである。

表 63. 【項目 60】「家庭生活、学校での学習や活動、地域の行事など生徒の身近な暮らしにかかわる場面を取り上げた言語活動をさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	6 人	23 人	74 人	23 人	126 人
全体に占める割合	4.8%	18.3%	58.7%	18.3%	100%

77%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、その中の 58.7%の教員は「時々行っている」と回答している。身近な暮らしに関わる言語活動は、行っている教員も多いものの、頻繁に行っている教員は少ないという現状が伺える。真正性のある言語活動の重要性を認識しながらも、実際にそのような場面設定を設け、実践するには準備と実践に時間が要されるため、かなり頻繁に行うことが困難であるとも考えられる。

表 64. 【項目 61】「辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるように指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	12 人	32 人	58 人	24 人	126 人
全体に占める割合	9.5%	25.4%	46.0%	19.0%	100%

65%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、その中の約 5 割の教員が「時々行っている」と回答している。辞書指導については行っている教員も一定程度いるものの、「かなり頻繁に行っている」教員は少ない。また、「(全く・ほとんど)行っていない」教員も約 35%もいる。簡単な辞書の使い方の例として、新出単語・熟語を教科書の後ろに記載されている辞書を使い指導が行える。しかし、その使い方に生徒が慣れれば、頻繁には辞書の使い方指導は行わないという見方もできる。

表 65. 【項目 62】「話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	6 人	41 人	57 人	22 人	126 人
全体に占める割合	4.8%	32.5%	45.2%	17.5%	100%

6 割を超える教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答したものの、「かなり頻繁に行っている」と回答している教員は 2 割にも満たない。思春期という年齢も要因しているためか、コミュニケーションをとることへの心理的不安が生じないように配慮しているという背景も考えられる。日頃からの授業内の雰囲気づくりや教師と生徒間の関係づくりが、特に思春期の生徒にとって重要な課題の1つと言える。

表 66. 【項目 63】「質問や依頼などを聞いて適切に応じさせる」の実践度

実践度	全く行っていない	ほとんど 行っていない	時々行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	6 人	22 人	62 人	36 人	126 人
全体に占める割合	4.8%	17.5%	49.2%	28.6%	100%

8 割近い教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、5 割超は「時々行っている」と回答している。項目 62・63・64 から、聞いたことへの理解や書き取り、それに対する応答についての指導は、行っている教員は多いものの、かなり頻繁に行っている教員は少ないことが伺える。

表 67. 【項目 64】「まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取らせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	5 人	20 人	71 人	30 人	126 人
全体に占める割合	4.0%	15.9%	56.3%	23.8%	100%

約 8 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。その中で「かなり頻繁に行っている」教員は 2 割程度であった。スピーチをさせるには、準備・練習時間が要され、スピーチを 1 人ずつ評価するにも授業時間を確保する必要がある。

表 68. 【項目 65】「与えられたテーマについて簡単なスピーチをさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	14 人	36 人	61 人	15 人	126 人
全体に占める割合	11.1%	28.6%	48.4%	11.9%	100%

約 6 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、その中の約 5 割の教員は「時々行

っている」と回答している。スピーチをさせるには、準備・練習時間が要され、スピーチを1人ずつ評価するにも授業時間を確保する必要がある。

表 69. 【項目 66】「話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	12 人	37 人	60 人	17 人	126 人
全体に占める割合	9.5%	29.4%	47.6%	13.5%	100%

半数以上の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、「時々行っている」との回答がほぼ 5 割近く、「かなり頻繁に行っている」のは 1 割程度である。実際にはあまり行っていない現状が伺える。教科書の文法事項や表現を習得するだけでなく、話の内容についてどう思うかなど、中学生の段階からクリティカル・シンキングの訓練は年々重要視されるようになってきている。しかし、クリティカル・シンキングのスキルを養う教授法に慣れていない教師も多いのが現状であると考えられる。

表 70. 【項目 67】「身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書かせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	8 人	31 人	63 人	24 人	126 人
全体に占める割合	6.3%	24.6%	50.0%	19.0%	100%

約 7 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、その中の 5 割は「時々行っている」との回答である。自分の考えや気持ちなどを書かせるライティング活動を「(全く・ほとんど)行っていない」との回答が 3 割を超える。項目 62～67 を見ると、スピーキング・ライティングのアウトプット活動はあまり行っていない様子が伺える。一方、項目 73 を見ると 4 技能を用いたコミュニケーション能力の育成のため、教材を選定しているという結果があり、教材は選定しているものの、活動としてはあまり行っていないという現状があることが分かる。これは、項目 110 と項目 119 のピラーと実際の活動の間のギャップにも現れており、その背景として生徒の英語力・理解力、教材(これは項目 73 と矛盾、自分で理想とする教材を選ぶことができない環境もあると考えられる)、時間(授業時間の不足)が考えられる。また、項目 71 では比較的高い数値が出ていることから、リスニング活動には重きが置かれているものの、スピーキング活動を十分に行えていない状況があるように推測できる。

表 71. 【項目 68】「自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを測れるような話題を取り上げる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	7 人	25 人	61 人	33 人	126 人
全体に占める割合	5.6%	19.8%	48.4%	26.2%	100%

約 75%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、約 5 割の回答者は「時々行っている」に過ぎないと回答している。項目 67・68 への回答結果より自分の身の回りの出来事や気持ちに関して、話題を取り上げて授業で扱うことについては、「(かなり頻繁に・時々)行っている」教員は多いものの、授業の中で「かなり頻繁に行っている」教員は少ないことが伺える。なぜそれほど扱わないのか、時間が足りない、準備の大変さ、などの理由のほか、どのような要因があるのか更なる分析を行いたい。

表 72. 【項目 69】「発音と綴りを関連付けて指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	3 人	12 人	67 人	44 人	126 人
全体に占める割合	2.4%	9.5%	53.2%	34.9%	100%

9 割近い教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。また、全回答者の 3 人に一人が「かなり頻繁に行っている」と回答している。綴り指導に関しては、積極的におこなっている教員が多いことが分かる。

表 73. 【項目 70】「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導する」の実践度

実践度	全く行っていない	ほとんど 行っていない	時々行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	3 人	12 人	58 人	53 人	126 人
全体に占める割合	2.4%	9.5%	46.0%	42.1%	100%

約 9 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。さらに、約 4 割の教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。項目 50 と同様に、文法指導を積極的に言語活動に結びつけて行っている教員が多い。また、項目 57 と繋げて考察すると、言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う教師が9割、「かなり頻繁に行っている」が過半数ということは、文法指導と言語活動の関連付けは効果的であると同時に、指導しやすいと認識している教師は多いものの、言語活動自体を行う時間の余裕がなかなかないという現状が見られる。

表 74. 【項目 71】「言語活動のうち、特に聞くこと及び話すことの言語活動に重点をおいて指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	7 人	19 人	66 人	34 人	126 人
全体に占める割合	5.6%	15.1%	52.4%	27.0%	100%

8 割近い教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、「時々行っている」との回答が過半数である。リスニング・スピーキング指導については、重きを置くことに肯定的ではあっても、活動として行うことに積極的な教員はそこまで多くはないといえる。

表 75. 【項目 72】「音声指導に当たっては、日本語との違いに留意しながら、発音練習などを通して言語材料を継続して指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	2 人	11 人	64 人	49 人	126 人
全体に占める割合	1.6%	8.7%	50.8%	38.9%	100%

約 9 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。さらに、3 人に一人を超える教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。

表 76. 【項目 73】「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮した教材を取り上げる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	7 人	14 人	61 人	44 人	126 人
全体に占める割合	5.6%	11.1%	48.4%	34.9%	100%

8割以上の教員が言語使用場面や言語の働きに配慮した教材を取り上げるよう意識していることが分かる。

表 77. 「かなり頻繁に行っている」の回答率を基準とした実践度が上位 5 位までの項目

順位	項目	%
1	【項目 52】「学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れて指導する」	65.9
2	【項目 58】「強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れさせ、正しく発音させる」	55.6
3	【項目 57】「言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う」	50.8
4	【項目 50】「文法事項の取り扱いについては、用語や用法の区別などを理解するだけでなく、実際に使わせる」	48.4
5	【項目 70】「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導する」	42.1

【項目 52】が最も高いことから、学習者中心でインタラクティブな学習形態が浸透していることが伺える。また、

【項目 58】は教室内活動として最もよく行われている活動のひとつでもある音読に関係しているのではなかろうか。さらに、残りの 3 項目は全て文法指導の一環であり、文法指導が頻繁に行われているようである。

表 78. 「全く行っていない」の回答率を基準とした実践度が下位 5 位までの項目

順位	項目	%
1	【項目 51】「生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用して指導する」	13.5
2	【項目 65】「与えられたテーマについて簡単なスピーチをさせる」	11.1
3	【項目 54】「聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる」	10.3
4	【項目 53】「伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる」	9.5
4	【項目 61】「辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるように指導する」	9.5
4	【項目 66】「話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえさせる」	9.5

【項目 51】が全く行っていない割合が最も高いことから、ICTを活用した指導がまだ広まっていないようである。また、【項目 65】・【項目 54】・【項目 53】・【項目 66】から、話したり書いたりする活動、および、その活動に関連する活動が全く行われている割合が高いのが現状のようである。

3.1.1.5 高等学校における英語の活動や指導の実践度

表 79. 【項目 74】「広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養う」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	9 人	42 人	120 人	55 人	226 人
全体に占める割合	4.0%	18.6%	53.1%	24.3%	100%

約 8 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。大多数の教員が実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮した教材を取り上げる必要性を認識しており、積極的に実行している教員も多い。また、項目 60 とリンクさせると、実際の言語使用場面など真正性のある言語活動の重要性を認識しながらも、準備と実践に時間が要されるため、かなり頻繁に行うことが困難であるとも考えられる。

表 80. 【項目 75】「世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	7 人	29 人	128 人	62 人	226 人
全体に占める割合	3.1%	12.8%	56.6%	27.4%	100%

項目 25・26・27 から、大多数の教員がグローバル化の進む中、国際人としての資質や英語力の育成が必要であるというピリーフを持っていることが分かっている。そして、約 8 割の教員が実際に「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、「かなり頻繁に行っている」との回答は 3 割近い。「(全く・ほとんど)行っていない」との回答が 2 割弱あり、これについてはなぜ行わないのか、さらに踏み込んだ分析が必要であろう。

表 81. 【項目 76】「生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	6 人	30 人	116 人	74 人	226 人
全体に占める割合	2.7%	13.3%	51.3%	32.7%	100%

約 8 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。さらに、3 割を超える教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。また、「かなり頻繁に行っている」よりも「時々行っている」の方が頻度が高いのは、現行のシラバスに沿った進度計画の都合もあるため、毎回中学の復習を組み込むことは不可能であるが、必要に応じて復習も踏まえるという体制を持っているという教員が多いことが予想される。

表 82. 【項目 77】「生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して言語活動を英語で行う」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	11 人	47 人	115 人	53 人	226 人
全体に占める割合	4.9%	20.8%	50.9%	23.5%	100%

教師が「言語活動」という概念をどのように捉えているのか、踏み込んで分析する必要がある。仮に、その概念にブレがあれば、「時々行っている」と答えている教員の率が多いことが予想され、「時々行っている」と答えた教員は「どのような言語活動」をおこなっているのか、更なる分析が必要となる。

表 83. 【項目 78】「チーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れ指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	8 人	18 人	86 人	114 人	226 人
全体に占める割合	3.5%	8.0%	38.1%	50.4%	100%

9 割以上が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。さらに、過半数の教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。項目 52 と同様、ペアワーク・グループワークは授業にかなり取り入れられている様子が伺える。ただし、中学校の教員の結果と比較すると、かなり頻繁に行っていると答えた比率は低く、中学校での方が授業においてペアワーク・グループワークを多用したスタイルをとっていることが窺える。また、中学に比べ、高校でのチーム・ティーチングの頻度は低い傾向があるため、その分、「かなり」の頻度が減っていることも考えられる。

表 84. 【項目 79】「文型・文法の解説をする」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	5 人	14 人	102 人	105 人	226 人
全体に占める割合	2.2%	6.2%	45.1%	46.5%	100%

9 割を超える教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。「時々行っている」と回答している教員と「かなり頻繁に行っている」と回答している教員がほぼ同数である。言い換えると、文法事項の解説をしている教員が多数派である上に、それも頻繁に行っている教員も半分近くを占めている。

表 85. 【項目 80】「事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	12 人	49 人	111 人	54 人	226 人
全体に占める割合	5.3%	21.7%	49.1%	23.9%	100%

「時々行っている」との回答が 5 割あり、「かなり頻繁に行っている」という回答と併せて、教員の 4 人に 3 人が聞き取った内容をもとに、概要や論点を捉えさせる指導をしている。

表 86. 【項目 81】「説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	5 人	12 人	119 人	90 人	226 人
全体に占める割合	2.2%	5.3%	52.7%	39.8%	100%

9 割を超える教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。さらに、4 割近い教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。これに比べると、項目 80 の「聞いて」要点をとらえる活動に関しては、「(かなり頻繁に・時々)行っている」教員の割合が 7 割と低くなり、「かなり頻繁に行っている」教員は 4 人に 1 人程度に留まっている。この結果が、授業における活動としてリスニングよりもリーディングに重きを置いているためなのか、「概要や要点を捉える」活動がリーディングにおいてより実施しやすいためなのか、進学実績を高めるなどの目的にかなった活動としてリーディングの方に重点を置いているためなのか、更なる調査や分析が必要である。項目 109・111 のビリーフにおいてはリーディングとリスニングにおける優先順位が見えてこない中、実践においてはこれだけの差が出ているのは興味深い。

表 87. 【項目 82】「読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	6 人	11 人	96 人	113 人	226 人
全体に占める割合	2.7%	4.9%	42.5%	50.0%	100%

約 9 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。特定情報の読み取りについて、同じリーディングでの概要や要点を捉える活動への回答と比較するとより多くの教員が行っている。さらに、「時々行っている」と回答している教員よりも、「かなり頻繁に行っている」と回答している教員の方が多い。

表 88. 【項目 83】「目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる」の実践度

回答の選択肢	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	6 人	18 人	98 人	104 人	226 人
全体に占める割合	2.7%	8.0%	43.4%	46.0%	100%

約 9 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。「時々行っている」と回答している教員と「かなり頻繁に行っている」と回答している教員の比率は同じくらいである。項目 81・82・83 から、高校においてはリーディングの指導を行っている教員は多く、「かなり頻繁に行っている」教員も半数近い。

表 89. 【項目 84】「内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	3 人	10 人	122 人	91 人	226 人
全体に占める割合	1.3%	4.4%	54.0%	40.3%	100%

94%の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しており、4 割の教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。指導の要素として、語句や文といった比較的小さい要素に絞って教えられるため、読み書きの指導としては取り組みやすいのではないかと推察される。

表 90. 【項目 85】「未知の語の意味を推測したり背景となる知識を活用したりしながら聞いたり読んだりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	4 人	27 人	115 人	80 人	226 人
全体に占める割合	1.8%	11.9%	50.9%	35.4%	100%

8 割を超える教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。さらに、3 割を超える教員が「かなり頻繁に行っている」と回答している。これも「未知語」という比較的小さな要素に絞っての指導が可能であることからリーディングスキルとしては指導しやすい側面があるのではないかと推察される。項目 84・85 から、リーディングにおいて文脈を意識させるような指導、推測や背景知識を活用した読み方の指導を行っている教員は多いことがわかる。しかし、かなり頻繁に行っている教員となるとその割合が限られていることから、高校において普段の授業で常態化してこのようなリーディングスキルの指導が行われているというにはまだ遠いといえる。

表 91. 【項目 86】「聞き手に伝わるように音読や暗唱をさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	6 人	30 人	102 人	88 人	226 人
全体に占める割合	2.7%	13.3%	45.1%	38.9%	100%

8 割を超える教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答している。「時々行っている」と回答している教員が、「かなり頻繁に行っている」と回答している教員より若干多い。音読指導や暗唱に関しては行っている教員が多い。しかし、同じスピーキング活動でもプレゼンテーションなのかスピーチや、音読なのか、種類によっては頻度が変わってくる可能性も考えられる。そして、設問にある「聞き手に伝わるように」という点の解釈や、また伝わるように、どのような具体的なポイントを指導しているのか、実際の授業での取り組み例などをもとに踏み込んでみていく必要がある。

表 92. 【項目 87】「聞いた内容について、概要や要点を書かせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	20 人	62 人	105 人	39 人	226 人
全体に占める割合	8.8%	27.4%	46.5%	17.3%	100%

約 6 割の教員が行っている「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、約 5 割が「時々行っている」に止まっている。また、「(全く・ほとんど)行っていない」教員も 3 割以上いることにむしろ着目したい。聞いた内容についてサマリーを書かせる活動については、行っている教員は相当の割合であるものの、頻繁に行っている教員は少ない。さらに、概要や要点を書かせる際に日本語で行うか、英語で書かせるか、またはアイデア・ユニットを設ける方法や、空所を埋める形式など、設定によって活動の難度がかかなり変わる点にも注意したい。

表 93. 【項目 88】「事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	21 人	80 人	94 人	31 人	226
全体に占める割合	9.3%	35.4%	41.6%	13.7%	100%

「(かなり頻繁に・時々)行っている」という回答が 5 割を超えるが、「(全く・ほとんど)行っていない」という回答の合計もほぼ半分に迫る。事実と意見の区別を意識した指導に関しては、ほかの指導と比較して積極的に行われてはならず、全体としてはあまり頻度は高くない現状が伺える。その理由の一つとして考えられるのが、「事実と意見などを区別する」という概念が意識化されていない可能性も考えられる。また、項目 87 と同じように、伝える際のアウトプットの言語を英語とするか日本語とするかによって、タスクとしての難度が変わる点も分析、解釈に際して注意が必要である。

表 94. 【項目 89】「説明や描写の表現を工夫して相手に効果的に伝わるように話したり書いたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	22 人	71 人	100 人	33 人	226 人
全体に占める割合	9.7%	31.4%	44.2%	14.6%	100%

約 6 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、「かなり頻繁に行っている」と回答しているのは 15 パーセントに満たない。アウトプット活動については、行っている教員はある程度いるものの、授業の中での恒常的な取り組みを行っている教員は少ないと考えられる。また、実際に行っている場合においても、どのような工夫をすることで相手に効果的に伝わるのか、アウトプットに際しての具体的な指導内容がどのようなものかについて更なる検証が必要であろう。

表 95. 【項目 90】「論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり書いたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	19 人	52 人	112 人	43 人	226 人
全体に占める割合	8.4%	23.0%	49.6%	19.0%	100%

約 7 割の教員が「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答しているものの、「かなり頻繁に行っている」と回答している教員は 2 割に満たない。この設問に関しては、複数の要素が取り込まれているため、教員がどこまでの意識を持ってこのような活動に取り組んでいるか、によって答え方がかわってしまうことが考えられる。しかし、語句や文といった小さな単位を超えて文脈や周辺情報とのつながり意識して行うリーディング、ライティング活動に対する取り組みを行っている高校教員が 7 割に上るということは肯定的な結果と言えよう。センター試験の問題に図表が用いられるようになったことも、影響していると考えられる。

表 96. 【項目 91】「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合いや意見の交換をさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	15 人	68 人	104 人	39 人	226 人
全体に占める割合	6.6%	30.1%	46.0%	17.3%	100%

「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答した割合は 6 割以上で、中学校の教員の回答に比べて、行っている割合が若干高くなっている。しかし、「かなり頻繁に行っている」と答えた教員は 2 割に満たず、このような活動を授業において継続的に実施することの難しさがこの結果に反映されているといえる。また、他のアウトプット活動と同じく、日本語での意見表出を認めるかどうかで生徒から引き出せる意見の広がり、深さが変わってくるものと思われることから、実際のアウトプットがどのように行われているか具体的な事例等を調べていく必要がある。このようなアウトプット活動の狙いをどこに置き、どこまでの難度を生徒に課すか、教員の言語使用に対するビリーフが

問われる部分である。

表 97. 【項目 92】「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	28 人	84 人	82 人	32 人	226 人
全体に占める割合	12.4%	37.2%	36.3%	14.2%	100%

「(かなり頻繁に・時々)行っている」と「(全く・ほとんど)行っていない」という回答はほぼ半々であった。項目 91 での意見の交換をさせる活動に比べ、行っている割合が低くなっている。生徒にとって「結論をまとめさせる」ほうがより活動としてのハードルが高いためではないかと推測する。

表 98. 【項目 93】「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、書かせたり、発表させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	21 人	62 人	104 人	39 人	226 人
全体に占める割合	9.3%	27.4%	46.0%	17.3%	100%

書かせたり発表させたりするアウトプット活動は、3 割を超える教員が「(全く・ほとんど)行っていない」と回答した。「かなり頻繁に行っている」教員が 2 割に満たないことから、このような活動が恒常的に授業で行われている高校は少ないといえる。項目 91・92・93 から、話し合ったり、意見交換をしたり、結論をまとめたり、という生徒同士がアクティブに主体的にかかわる必要のあるアウトプット活動を頻繁に行っている教員は少ないことが分かる。項目 87～90 での音読、暗唱、発表などのアウトプット活動は行っている教員の比率は高いが、「かなり頻繁に行っている」割合はぐっと低くなる。全体としてこのような活動の割合が低いということは、授業におけるアウトプットの機会が少なく、項目 91・92・93 にある、話し合いや結論をまとめる等のより高次元の言語活動・コミュニケーション活動への準備が不足した状態であるととらえることができる。

表 99. 【項目 94】「より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	18 人	68 人	105 人	35 人	226 人
全体に占める割合	8.0%	30.1%	46.5%	15.5%	100%

書く過程を重視した指導に関して、全回答者の 4 割近くが「(全く・ほとんど)行っていない」と回答した。アウトプットの重要性は認識されているが、実際に指導を行っている割合は低く、その中でもスピーキングに比べてライテ

インクの指導はあまり行われていない。これも、現場の教員がライティングの採点を頻繁に行うだけの時間の余裕がないことが伺える。また、採点基準といった問題も考えられる。

表 100. 【項目 95】「与えられた話題や条件に応じて、即興で話させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	48 人	63 人	87 人	28 人	226 人
全体に占める割合	21.2%	27.9%	38.5%	12.4%	100%

即興のスピーキング活動は、「(かなり頻繁に・時々)行っている」と「(全く・ほとんど)行っていない」がほぼ半々の結果だが、特筆すべきは「全く行っていない」教員の割合が 2 割と大きい点である。なぜ行っていないのか、その理由と照らし合わせての分析が今後必要であろう。

表 101. 【項目 96】「伝えたい内容を整理して論理的に話させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	47 人	75 人	83 人	21 人	226 人
全体に占める割合	20.8%	33.2%	36.7%	9.3%	100%

論理的に話す活動は、「(かなり頻繁に・時々)行っている」が 5 割を超える。しかし、「全く行っていない」比率が 2 割を超え、「かなり頻繁に行っている」教員は 1 割にも満たない。項目 95・96 から、スピーキングのアウトプット活動に関しては、「(全く・ほとんど)行っていない」割合が高い。「全く行っていない」教員の割合が他の活動に比して高く、さらに行っている場合でも、「かなり頻繁に行っている」と答えている教員の比率が低い。高校におけるアウトプット活動の低さ、特にスピーキングにおける活動の頻度の低さが顕著である。項目 110 のビリーフと項目 119 の実践のギャップを具現化するような数値となっている。その理由として、体系立てた指導が定着できていないことが理由の 1 つとして考えられる。

表 102. 【項目 97】「場面やことばの働きを設定して書かせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	34 人	73 人	98 人	21 人	226 人
全体に占める割合	15.0%	32.3%	43.4%	9.3%	100%

「(かなり頻繁に・時々)行っている」と「(全く・ほとんど)行っていない」が約半々の割合となっており、「時々行っている」と「ほとんど行っていない」に全回答の 75%程度が集中している。そのため、「場面やことばの働きを設定して書かせる」、いわば条件を与えてのライティング活動に関しては、積極的に行われているとはいえない現状がみられる。「ことばの働き」という概念が、どのように認識されているのかという問題が残るが、例えば「ホストファミリ

一に手紙を書く」といったような活動は、進度状況によっては省いてしまう傾向も見られる。その理由として、採点や評価基準の設定が曖昧となるため、定期テストでの出題を避けるとなれば必然と授業では省略されてしまうことも考えられる。

表 103. 【項目 98】「発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	47 人	78 人	76 人	25 人	226 人
全体に占める割合	20.8%	34.5%	33.6%	11.1%	100%

聞いた後に質問をしたり意見を述べるなどさせるスピーキング活動は、全回答者の半数以上が「(全く・ほとんど)行っていない」ようである。「(かなり頻繁に・時々)行っている」のは4割で、「かなり頻繁に行っている」教員は1割である。項目 95・96 から、アウトプット活動の少なさが指摘されており、この項目 98 の前提となる「発表されたものを聞く」機会がそもそも少ない現状がある。このことが実施率の低さにつながっていると推測できる。

表 104. 【項目 99】「幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	58 人	80 人	68 人	20 人	226 人
全体に占める割合	25.7%	35.4%	30.1%	8.8%	100%

幅広い話題に関する意見交換や討論といった高次の英語活動は「(かなり頻繁に・時々)行っている」という回答の割合が4割未満と低かった。また、「(全く・ほとんど)行っていない」と回答した高校教員の半数近くが「全く行っていない」と回答している。高校において、このような活動にはなかなか取り組めていない様子が伺えた。

表 105. 【項目 100】「リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら話させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	12 人	51 人	114 人	49 人	226 人
全体に占める割合	5.3%	22.6%	50.4%	21.7%	100%

スピーキング活動、その中でも delivery の要素に着目させながらの活動は、「(かなり頻繁に・時々)行っている」と回答した教員が7割を超えているものの、約5割は「時々行っている」との回答であった。このような活動の重要性を意識して指導をしている教員は多くとも、実際に頻繁に行っている教員はそれほど多くはないことが窺える。項目 86 との関連において、音読活動を積極的に行っている教員はこのような活動に対しても肯定的であり、積極的な取り組みをしていることが予測できる。今後のさらなる分析が求められる。

表 106. 【項目 101】「論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連、表現の工夫などを考えながら書かせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	36 人	72 人	95 人	23 人	226 人
全体に占める割合	15.9%	31.9%	42.0%	10.2%	100%

「(かなり頻繁に・時々)行っている」と「(全く・ほとんど)行っていない」との回答がほぼ半々に分かれている。また、「全く行っていない」との回答が 2 割近くもある。ライティングの活動についても低い数値が出ており、ライティング活動の指導自体を授業において恒常的に行っている教員がそれほど多くない中、文章構成、表現の工夫とさらにハードルの高いライティング活動を生徒に課すことの難しさがうかがえる回答である。これが教員の年代によるのか、海外経験の少なさから来る「ネイティブでないライティングをチェックすることができない」というネイティブ信仰のようなものから来ているのか、あるいは添削や指導時間の確保などの実質的な困難が原因であるのか、さらに分析を進めてゆくべきであろう。また、項目 112・113 のビリーフと項目 125・128 の実践においても結果にギャップが現れており、ライティングが大切と感じながらも実践できていない現状が伺える。

表 107. 【項目 102】「発表の仕方や討論のルール、それらの活動に必要な表現などを学習するように指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	46 人	72 人	86 人	22 人	226 人
全体に占める割合	20.4%	31.9%	38.1%	9.7%	100%

ほぼ半々で「(かなり頻繁に・時々)行っている」と「(全く・ほとんど)行っていない」の回答が分かれている。しかし、「全く行っていない」比率が 2 割を超えているのに対し、「かなり頻繁に行っている」との回答は 1 割に満たない。このような指導を行う方が良い、行うべきだとのビリーフを持ちながら実際の指導が行えずにいるのではないかと推察される。

表 108. 【項目 103】「学習した事柄や表現などを発表や討論などの活動で実際に活用するように指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	38 人	78 人	85 人	25 人	226 人
全体に占める割合	16.8%	34.5%	37.6%	11.1%	100%

「まったく行っていない」と「かなり頻繁に行っている」が全体の 1、2 割に過ぎず、「ほとんど行っていない」と「時々行っている」がほぼ同じ割合であることから、発表や討論の活動の定着の有無は半々に分かれる。

表 109. 【項目 104】「聞いたり読んだりした内容について、そこに示されている意見を他の意見と比較して共通点や相違点を整理したり、自分の考えをまとめたりさせる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	38 人	82 人	82 人	24 人	226 人
全体に占める割合	16.8%	36.3%	36.3%	10.6%	100%

項目 103 と同様に、「全く行っていない」と「かなり頻繁に行っている」が全体の1、2割に過ぎず、「ほとんど行っていない」と「時々行っている」がほぼ同じ割合であることから、発表や討論の活動の定着の有無は半々に分かれる。

表 110. 【項目 105】「相手の立場や考えを尊重し、互いの発言を検討して自分の考えを広げるとともに、課題の解決に向けて考えを生かし合うように指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	43 人	98 人	66 人	19 人	226 人
全体に占める割合	19.0%	43.4%	29.2%	8.4%	100%

「(全く・ほとんど)行っていない」比率が 6 割以上と高い。「かなり頻繁に行っている」教員は 1 割に満たない。項目 104・105 のような高次元活動の実践の低さが、どのような要因に起因しているのかの分析が必要である。また、このような活動及び指導が英語ではなく母語である日本語で行われているのか、行われている場合にそれが英語での指導に生かされているのか、さまざまな実践例をもとにした検証が求められる。

表 111. 【項目 106】「話したり書いたりする言語活動を中心に指導する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	14 人	46 人	125 人	41 人	226 人
全体に占める割合	6.2%	20.4%	55.3%	18.1%	100%

回答した教員が、「言語活動」をどのような定義として捉えているのか曖昧な点はあるが、「(かなり頻繁に・時々)行っている」教員が 7 割を超え、過半数が「時々行っている」と回答している。これまで、アウトプット活動の低さを指摘してきたものの、この間に関してはあまり低くない。スピーキングの活動の低さが顕著だったことから、この設問に関しては「書いたり」という活動を行っていることをもとに回答した結果とも考えられる。その場合、自分の意見や考え、要約などの open-ended や semi-open-ended なライティング活動と、文法の演習問題のようなライティング活動との区別がなされているのか、またどのような教員ビリーフを表したもののなのかを精査していく必要がある。

表 112. 【項目 107】「聞くこと、読むことを有機的に関連付けた活動を行うことによって、話すこと、書くことの指導の効果を高めるよう工夫する」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	19 人	61 人	111 人	35 人	226 人
全体に占める割合	8.4%	27.0%	49.1%	15.5%	100%

「(かなり頻繁に・時々)行っている」割合が 7 割近くと高い。「全く行っていない」教員は 1 割以下と少ない。項目 106・107 から、アウトプット活動を重視している教員は多いものの、その大半は「時々行っている」と回答しており、「かなり頻繁に行っている」教員はさほど多くはない。その理由として時間的制約を挙げている教員が多数いたことから、インプット活動と有機的に関連付けたアウトプット活動を行うことによって限られた時間の中で指導の効果を高めるよう工夫しようとする意識の高さが現れていると言える。また、今も尚、それぞれ4技能を連結せずに、技能を単独で指導を行っているという背景が原因しているのではないのか踏み込んで分析をおこなう必要があると考えられる。

表 113. 【項目 108】「生徒の実態に応じて、多様な場面における言語活動を経験させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	19 人	61 人	111 人	35 人	271 人
全体に占める割合	8.4%	27.0%	49.1%	15.5%	100%

「(かなり頻繁に・時々)行っている」割合が約65%と高い。しかし、49.1%は「時々行っている」と回答しており、「かなり頻繁に行っている」のは15%にとどまる。また、TBLTのTaskとPPPのProductionは異なる理論を背景にしているものの、活動自体は似ているため、ここでも「言語活動」の定義が曖昧であるという可能性も考えられる。生徒の様子を見ながら、様々な言語活動を提供している教員は多いものの、頻繁に行っている教員はそれほど多くないことがわかる。ビリーフと実施状況の差がこの数字にそのまま反映されているのか、そうであれば実施を阻む原因が何であるかを今後掘り下げたい。

表 114. 「かなり頻繁に行っている」の回答率を基準とした重要度が上位 5 位までの項目

順位	項目	%
1	【項目 78】「チーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れ指導する」	50.4
2	【項目 82】「読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる」	50.0
3	【項目 79】「文型・文法の解説をする」	46.5
4	【項目 83】「目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる」	46.0
5	【項目 84】「内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりさせる」	40.3

中学校でも【項目 52】「学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れて指導する」が 65.9%の回答者が「かなり頻繁に行っている」と回答して、最も高い割合となっていたが、高等学校でもどのような指導の【項目 78】が最も高く、ここでも学習者中心でインターラクティブな教室活動が行われている様

子が伺える。また、【項目 82】・【項目 83】・【項目 84】が高いことから、リーディング活動が頻繁になされているようである。さらに、【項目 79】から、中学校同様に文法指導が重視されているようである。

表 115. 「全く行っていない」 の回答率を基準とした重要度が下位 5 位までの項目

順位	項目	%
1	【項目 99】「幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)させる」	25.7
2	【項目 95】「与えられた話題や条件に応じて、即興で話させる」	21.2
3	【項目 96】「伝えたい内容を整理して論理的に話させる」	20.8
4	【項目 98】「発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりさせる」	20.8
5	【項目 102】「発表の仕方や討論のルール、それらの活動に必要な表現などを学習するように指導する」	20.4

上位 5 位までの項目は全て高度なスピーキング活動である。この中には【項目 98】のような技能統合型の活動も含まれている。これらの活動を実施するためには、【項目 102】のような準備活動も必要であるが、現状ではそのような活動でさえも「全く行っていない」割合が高いようである。

3.1.1.6 中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の重要度

表 116. 【項目 109】「英語を聞いて話し手の意向などを理解させる」の重要度

重要度	全く大切だと思わない	あまり大切だと思わない	大切だと思う	とても大切だと思う	全回答者
回答者数	4人	1人	107人	159人	271人
全体に占める割合	1.5%	0.4%	39.5%	58.7%	100%

ほぼ全員が「とても大切だと思う」もしくは「大切だと思う」と回答している。また、「とても大切だと思う」と回答した教員も6割近くに上っている。

表 117. 【項目 110】「英語で自分の考えなどを話させる」の重要度

重要度	全く大切だと思わない	あまり大切だと思わない	大切だと思う	とても大切だと思う	全回答者
回答者数	6人	4人	95人	166人	271人
全体に占める割合	2.2%	1.5%	35.1%	61.3%	100%

大多数が「とても大切だと思う」もしくは「大切だと思う」と回答している。また、「とても大切だと思う」と回答した教員も6割を超えている。

表 118. 【項目 111】「英語を読んで書き手の意向などを理解させる」の重要度

重要度	全く大切だと思わない	あまり大切だと思わない	大切だと思う	とても大切だと思う	全回答者
回答者数	5人	1人	98人	167人	271人
全体に占める割合	1.8%	0.4%	36.2%	61.6%	100%

「とても大切だと思う」と「大切だと思う」と合わせると97.8%にも上る。また、「とても大切だと思う」と答えた教員も6割を超えてかなり多い。

表 119. 【項目 112】「英語を用いて自分の考えなどを書かせる」の重要度

重要度	全く大切だと思わない	あまり大切だと思わない	大切だと思う	とても大切だと思う	全回答者
回答者数	6人	3人	103人	159人	271人
全体に占める割合	2.2%	1.1%	38.0%	58.7%	100%

ほぼ全員が「とても大切だと思う」もしくは「大切だと思う」と回答している。また、「とても大切だと思う」と回答した教員も6割弱と多い。

表 120. 【項目 113】「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる」の重要度

重要度	全く大切だと思わない	あまり大切だと思わない	大切だと思う	とても大切だと思う	全回答者
回答者数	5 人	4 人	113 人	149 人	271 人
全体に占める割合	1.8%	1.5%	41.7%	55.0%	100%

「とても大切だと思う」と「大切だと思う」を合わせると 96.7%にも上り、この活動はほぼ全員が重要だと思っている。また、「とても大切だと思う」と回答した教員も 6 割弱となっている。

表 121. 【項目 114】「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた活動をする」の重要度

重要度	全く大切だと思わない	あまり大切だと思わない	大切だと思う	とても大切だと思う	全回答者
回答者数	4 人	7 人	81 人	179 人	271 人
全体に占める割合	1.5%	2.6%	29.9%	66.1%	100%

「(全く・あまり)大切だと思わない」と回答した人はわずかに 4.1%のみで、「大切だと思う」と「とても大切だと思う」を合わせると 95%を超えている。さらに、「とても大切だと思う」と回答した教員も 6 割を超えており、重要度がとても高い活動となっている。

表 122. 【項目 115】「授業は基本的に英語で行う」の重要度

重要度	全く大切だと思わない	あまり大切だと思わない	大切だと思う	とても大切だと思う	全回答者
回答者数	9 人	59 人	130 人	73 人	271 人
全体に占める割合	3.3%	21.8%	48.0%	26.9%	100%

「とても大切だと思う」もしくは「大切だと思う」と答えた割合が約 75%と多い。しかし、「大切だと思う」という回答が半数を占めており、「とても大切だと思う」という回答は 3 割に満たない。また、「あまり大切だと思わない」と回答した教員は 2 割以上もいる。

表 123. 「とても大切だと思う」の回答率を基準とした重要度順

順位	項目	%
1	【項目 114】「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた活動をする」	66.1
2	【項目 111】「英語を読んで書き手の意向などを理解させる」	61.6
3	【項目 110】「英語で自分の考えなどを話させる」	61.3
4	【項目 109】「英語を聞いて話し手の意向などを理解させる」	58.7
5	【項目 112】「英語を用いて自分の考えなどを書かせる」	58.7
6	【項目 113】「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる」	55.0
7	【項目 115】「授業は基本的に英語で行う」	26.9

【項目 114】にある 4 技能統合型の活動の重要度が最も高く、【項目 111】・【項目 110】・【項目 109】・【項目 112】

のような各技能別の活動や【項目 113】の高度な産出活動がそれに続いている。【項目 115】の英語による授業の重要度は大きく下がっており、「とても大切だと思う」のは4名中1名の割合である。

3.1.1.7 中学校・高等学校の英語教員の英語の活動や指導の実施度および理由

表 124. 【項目 116】「英語を聞いて話し手の意向などを理解させる」の実践度

実践度	全く 行っていない	ほとんど 行っていない	時々 行っている	かなり頻繁に 行っている	全回答者
回答者数	9 人	52 人	155 人	55 人	0 人
全体に占める割合	3.3%	19.2%	57.2%	20.3%	100%

「時々行っている」が半数以上を占め、「全く行っていない」は3割程度である。

表 125. 【項目 117】「行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っている理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分ある。	76 件	14.7%
生徒が興味・関心を示す。	150 件	29.0%
教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。	32 件	6.2%
学習指導要領通りに教えることが大切である。	27 件	5.2%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。	76 件	14.7%
自分の英語力に自信がある。	27 件	5.2%
関連する指導法や教授法などを学んだことがある。	65 件	12.5%
入試に必要である。	46 件	8.9%
その他(具体的に)	19 件	3.7%
<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションスキルの 1 つだから。その上達のために。 ・英語を使おうという雰囲気を作り出せる ・英語にさらされる時間、量を増やすため ・本当に簡単な指示文だけですが、英語を英語で理解して反応できるようにするために。 ・生徒の進路(職業も含め)や視野を広めるため、英語の理解が必要だから ・英語と日本語の変換で終わらせること無く、想像力を使い、創造力を育む上で大切だから ・大切・必要だと思うから ・実際にそうした力が必要だから ・出来るだけ英語を使う場面を増やす一助とするため ・主体的に判断し、思考する、生徒中心の授業をするため ・教室内でしか意識的に英語に触れる機会のない生徒たちがほとんどの環境の中で、英語に触れる時間を少しでも増やしたい。 ・生徒にとって卒業後も必要な技能だから ・まずは生徒に英語のシャワーを浴びせる。そうしないと書いたり話したりというアウトプットは難しい。 ・学校の方針 ・リスニングをやると、基本的についてくる ・コミュニケーションに不可欠である ・相手に興味を持ち理解しようとする態度を育てることはコミュニケーションにとって不可欠であると考えから。 ・ネイティブスピーカーとの TT の授業が主なため、生徒が英語で何を言っているか理解できるようにしている。 ・言語学習において必要だと思うから 		
その他(具体的に)	19 件	3.7%
全回答	518 件	100%

「生徒が興味・関心を示す」ことが約 3 割で「英語を聞いて話し手の意向などを理解させる」活動を行う最たる理

由である。

表 126. 【項目 118】「行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っていない理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分でない。	33 件	23.6 %
生徒が興味・関心を示さない。	11 件	7.9 %
教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。	13 件	9.3 %
学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。	11 件	7.9 %
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。	30 件	21.4 %
自分の英語力が不足している。	12 件	8.6 %
どのように教えれば良いか分からない。	11 件	7.9 %
入試に対応していない。	11 件	7.9 %
その他(具体的に)	8 件	5.7 %
<ul style="list-style-type: none"> ・ここでいう活動がどのようなものかわかりにくいので答えづらい。ちょっとした意見交換を英語でやることは良くやっている。プレゼンやスピーチはやることがあるという程度。 ・時間が足りない ・話し手の意向が何かを問うような設問が、今使っている教材に載っていない。 ・生徒が理解したかどうかを測るために日本語で説明させます。英語で説明はできません。疑問に感じます。 ・教科書の内容が詰め込みすぎのため、おわらせることに注意・時間が取られてしまう ・現在中学一年担当のためこのレベルで出来るだけ取り入れているが、不十分だと感じている。 ・先輩の先生がそういうのが嫌いなので、それに合わせなければならない。 ・指導法の問題。 		
全回答	140 件	100%

「生徒の英語力・理解力が十分でない」と「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)」がそれぞれに 2 割を超えている。しかし、1 割台の理由はなく、他の理由は 1 割未満となっている。

表 127. 【項目 119】「英語で自分の考えなどを話させる」の実践度

実践度	全く行っていない	あまり行っていない	ときどき行っている	常に 行っている	全回答者
回答者数	29 人	73 人	125 人	44 人	271 人
全体に占める割合	10.7%	26.9%	46.1%	16.2 %	100%

「(全く・あまり)行っていない」割合は 4 割弱もあり実践に結びついていないことが伺える。また、「常に行っている」教員も 16.2%と多くはない。項目 109・118 と同様に、強いピリーフであるのにも関わらず、常に行うことができている教員は少ない現状が伺える。

表 128. 【項目 120】「行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っている理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分である。	68 件	17.6%
生徒が興味・関心を示す。	122 件	31.5%
教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。	26 件	6.7%
学習指導要領通りに教えることが大切である。	16 件	4.1%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい (教材の難易度、内容など)。	48 件	12.4%
自分の英語力に自信がある。	15 件	3.9%
関連する指導法や教授法などを学んだことがある。	4 件	12.4%
入試に必要である。	15 件	3.9%
その他 (具体的に)	29 件	7.5%
<ul style="list-style-type: none"> ・クリティカルシンキング・スキル を身につけさせることが非常に重要だと考えるため ・この活動は英語で授業をすれば自然に増える。生徒が英語で話す機会を多く作りたい。意見を持つことは大切である。 ・場数を踏むことが上手につながるから。 ・生徒の英語力向上に必要なだから ・知識の習得と練習による自動化は別のものであるため。話すことでしか話せるようにならないと考えます。 ・グローバルな社会で活躍して欲しいので ・生徒の意欲につながる ・生徒にとってアウトプットの機会は必要であるから。 ・生徒の英語力が不十分であっても、表現させる機会を確保すべきと思うからです。 ・AETとのチームティーチングで毎回の授業中 2 人の生徒がテーマに沿って話すことになっていた。 ・アウトプットの量を多くしたい ・必要だと思うから ・必要な力だと思うから ・話題によっては、英語自体に興味がない生徒も興味を持てるから。 ・実際にそうした力が必要だから。 ・最終的な目標を考えたい場合、避けて通れない重要事項と考えるため ・授業の導入として簡単な挨拶を英語で行う等、生徒の負担を少なくしてあげると興味を示してくれるから。 ・英語を「今、ここで、私が」使うことが英語力の向上に貢献すると考えているから ・己肯定感の向上 ・英語で自己表現する力を育成することは生涯学習、キャリア教育につながるだけでなく、一生を支えるスキルになると確信しているから ・コミュニケーションが一番大事なことから ・話すことにより、習得した内容を自分の中で整理・再構成できるので ・学校の方針 ・生徒の理解度の把握・意見を言うことに慣れることが大切 ・それができることにより、下支えの読む、聞く、書くが、補強されるから ・コミュニケーションに不可欠である ・アウトプットも大事だと思うから ・能動的に授業を聞き参加する態度を育成するため。 ・言語学習に必要な活動だから 		
全回答	387 件	100%

「英語で自分の考えなどを話させる」活動を行っている理由で最も多いものは、「生徒が興味・関心を示す」で 3 割を超えた。次に、「生徒の英語力・理解力が十分である」が続いた。逆に、最も少なかった理由は「自分の英語力に自信がある」と「入試に必要である」であった。

表 129. 【項目 121】「行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っていない理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分でない。	67 人	30.3%
生徒が興味・関心を示さない。	16 人	7.2%
教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。	24 人	10.9%
学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。	13 人	5.9%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。	48 人	21.7%
自分の英語力が不足している。	11 人	5.0%
どのように教えれば良いか分からない。	15 人	6.8%
入試に対応していない。	21 人	9.5%
その他(具体的に)	6 人	2.7%
<ul style="list-style-type: none"> ・時間数不足 ・授業時間が足りない。 ・教科書等を進めるにあたり時間の確保が難しい ・評価できない ・授業時間が足りない。現在完了形を教えることよりも、シンプルな英語で沢山表現できるよう指導したいが、指導要領に沿って教えなければならないので、それができない。 ・学習が進んだら取り入れる予定。 		
全回答	221 人	100%

「生徒の英語力・理解力が十分でない」が最も多くの教員が挙げる理由である。これに続くのは「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)」であるが、2 割を超える理由となっており、前者と合わせて半分以上を占めている。

表 130. 【項目 122】「英語を読んで書き手の意向などを理解させる」の実践度

実施度	全く行っていない	あまり行っていない	ときどき行っている	常に 行っている	全回答者
回答者数	10 人	39 人	151 人	71 人	271 人
全体に占める割合	3.7%	14.4%	55.7%	26.2%	100%

約 8 割の教員が「(常に・ときどき)行っている」と回答した。しかし、「ときどき行っている」教員が約 6 割と一番多い。強いビリーフではあるが、実践においては「ときどき行っている」と回答している教員が多く(55.7%)、常に実践出来ているわけではないことが伺える。

表 131. 【項目 123】「行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っている理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分である。	78 件	15.5%
生徒が興味・関心を示す。	106 件	21.1%
教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。	31 件	6.2%
学習指導要領通りに教えることが大切である。	18 件	3.6%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。	101 件	20.1%
自分の英語力に自信がある。	12 件	2.4%
関連する指導法や教授法などを学んだことがある。	50 件	10.0%
入試に必要である。	88 件	17.5%
その他 (具体的に)	18 件	3.6%
<ul style="list-style-type: none"> ・筆者の意見を正しく読み取ったり、背景まで考えて文章を読んだりすることは非常に大切だと思うから。 ・行間を読ませ、内容を深く知ることの面白さを伝えたい。 ・多くの知識、技能を使って理解につなげられる訓練になるから。 ・多読のあとのリアクションとして ・知識を深めるため、英語の文献にあたる機会もあると思うので ・ペアワークをする内容として向いている。 ・行間を読むことが重要だと考えるから ・どの言語でも必要なスキルだと思うから ・必要だと思うから ・深い理解のため ・実際にそうした力が必要だから ・要約する力をつけるため ・コミュニケーションの基本だから ・まずは英語のシャワーを浴びせる。そうしないと書いたり話したりというアウトプットは難しい。 ・経験的に、読みが深くなるから ・コミュニケーションに不可欠である ・インプットも同様に大切だから ・習得すべきスキルの 1 つだから 		
全回答	502 件	100%

「生徒が興味・関心を示す」、「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)」、「入試に必要である」、「生徒の英語力・理解力が十分である」が主要な要因のようである。話す活動の実施の理由には見られなかった「入試に必要である」と回答した教員が多い。

表 132. 【項目 124】「行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っていない理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分でない。	29 件	28.7%
生徒が興味・関心を示さない。	12 件	11.9%
教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。	10 件	9.9%
学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。	6 件	5.9%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。	25 件	24.8%
自分の英語力が不足している。	2 件	2.0%
どのように教えれば良いか分からない。	11 件	10.9%
入試に対応していない。	1 件	1.0%
その他(具体的に)	5 件	5.0%
<ul style="list-style-type: none"> ・大学の過去問にある総合読解問題を主にやらせることが多いため。 ・生徒の解釈がさまざまであり、たいていは的外れです。対応に苦慮します。 ・長文を扱う時間を余り持つことが出来ない ・まだ教科書の内容が追いついていない。時々補助教材を使用するが、不十分。 ・担当科目の関係上できない。 		
全回答	101 件	100%

「生徒の英語力・理解力が十分でない」と「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)」が多くの教員が挙げる理由となっている。

表 133. 【項目 125】「英語を用いて自分の考えなどを書かせる。」の実施度

実施度	全く行っていない	あまり行っていない	ときどき行っている	常に 行っている	全回答者
回答者数	20 人	59 人	147 人	45 人	271 人
全体に占める割合	7.4%	21.8%	54.2%	16.6%	100%

「(常に・ときどき)行っている」と約 7 割の教員が回答した。「ときどき行っている教員」が 54.2%と最も多い。強いビリーフではあるものの、実践に関しては「ときどき行っている」と回答する教員が多いことから、常に実践出来ているわけではないようである。

表 134. 【項目 126】「行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っている理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分である。	73 件	17.2%
生徒が興味・関心を示す。	111 件	26.2%
教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。	11 件	2.6%
学習指導要領通りに教えることが大切である。	16 件	3.8%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。	67 件	15.8%
自分の英語力に自信がある。	10 件	2.4%
関連する指導法や教授法などを学んだことがある。	43 件	10.1%
入試に必要である。	64 件	15.1%
その他 (具体的に)	29 件	6.8%
<ul style="list-style-type: none"> ・クリティカルシンキング・スキルを身につけさせるため ・論理的な文章を書く力をつけることは大切だと思う。また実際に使ってみてこそ文法・表現は見に着くと思う。間違いをするのも上達の内である。 ・書く力の流暢性を高めたい。 ・意見が言える、ことが、グローバル化への 1 歩だから。 ・自分の意見を書く練習が必要だから。 ・大切なことだから ・ディベート、卒業論文指導において行っています。 ・検定試験のため ・自分の意見を英語で表す事のできる人間に育てたいので ・SELHIを通して研究された学校独自のライティング教材がすでにあつた。 ・書くことへの抵抗を少しでも減らすためです。しかし残念なことに、生徒は「こんなことやっても無駄だ」とよくいいます。 ・受身ではなく能動的な学びが必要であるから。間違いを恐れずやらせている。 ・AETとのチームティーチングで毎月 1 回エッセイライティングをしている。 ・必要だと思うから ・英語を通しての教員による生徒理解と生徒の相互理解の為 ・実際にそうした力が必要だから ・英語でプレゼン、スピーチする授業なので ・自分の考えを整理するため ・習得した内容の再構成のため ・自身の留学経験から ・作文は添削に時間がかかり、教員の英語力も問われる。だが、生徒の表現力を高めるためには必要な指導である。表現力を ・To improve students' ability to express their own ideas ・形(紙面)に残るので評価がしやすい。 ・受身だけでなく、英語で発信できるようになってほしいと考えて ・コミュニケーションに不可欠である ・4技能をバランスよく学びたいから ・内容は極簡単なものであるが、生徒が書いた英文は必ずネイティブが添削している ・語学の学習は読んで聞いて書いて話すことだから ・生徒たちが将来最も求められる英語の力であると考えから 		
全回答	424 件	100%

「英語を用いて自分の考えなどを書かせる」活動を行っている理由は、多いものから順に「生徒が興味・関心を示す」、「生徒の英語力・理解力が十分である」、「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)」であり、5 番目に「入試に必要である」もあった。

表 135. 【項目 127】「行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っていない理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分でない。	45 件	27.3%
生徒が興味・関心を示さない。	14 件	8.5%
教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。	32 件	19.4%
学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。	11 件	6.7%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。	27 件	16.4%
自分の英語力が不足している。	12 件	7.3%
どのように教えれば良いか分からない。	11 件	6.7%
入試に対応していない。	7 件	4.2%
その他(具体的に)	6 件	3.6%
<ul style="list-style-type: none"> ・口頭では行うが、中1のため書くのは後にまわしている。 ・授業内で割ける時間が限られてる ・使用教材、指導内容、定期考査出題内容などを考慮すると、そのような指導をするための時間を割くことが難しい。 ・時間不足 ・Writing やネイティブの先生の時間が別に設定されているため ・ネイティブ教員が英語表現で行っているため。 		
全回答	165 件	100%

「英語を用いて自分の考えなどを書かせる」活動を行っていない理由は、他の活動の未実施の理由と同様に、「生徒の英語力・理解力が十分でない」、「教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)」、「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)」を挙げる教員が多かった。その他との理由として、ネイティブの教員が担当しているからというものもあった。

表 136. 【項目 128】「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる。」の実施度

実施度	全く行っていない	あまり行っていない	ときどき行っている	常に 行っている	全回答者
回答者数	45 人	91 人	106 人	29 人	271 人
全体に占める割合	16.6%	33.6%	39.1%	10.7%	100%

「(常に・ときどき)行っている」と「(全く・あまり)行っていない」と回答した教員の割合は半々となっている。

表 137. 【項目 129】「行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っている理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分である。	47 人	15.0%
生徒が興味・関心を示す。	90 人	28.7%
教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。	14 人	4.5%
学習指導要領通りに教えることが大切である。	19 人	6.1%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。	45 人	14.3%
自分の英語力に自信がある。	4 人	1.3%
関連する指導法や教授法などを学んだことがある。	36 人	11.5%
入試に必要である。	41 人	13.1%
その他 (具体的に)	18 人	5.7%
<ul style="list-style-type: none"> ・添削やスピーチ指導など、教員にとっては時間的にも英語力的にも大変な指導だが、生徒の表現力を高めるためには必要な指導。 ・必要だから ・それが英語の学習だと思うから ・They are required to think logically ・表現力が伸びるから ・即興性を鍛えるため ・英語で書くには理論が大切なので ・どの言語であってもコミュニケーションをとる上で必要なことだと思います。 ・実際にそうした力が必要だから ・必要だと思うから ・SELHIを通して研究された学校独自のライティング教材がすでにあった。 ・プレゼン能力の育成 ・大学進学後に必要である。 ・生徒に自分の意見をはっきりと伝えられる能力をつけさせるため ・地球市民の能力として不可欠である ・アウトプットの機会が必要であるから。 ・論理的に書く練習をすれば、読解のルールも身につくので ・読んだり、書いたりなどいろいろな活動をした方が英語の運用能力が高まる。2つの活動を組み合わせた方が生徒も積極的に取り組む。 		
全回答	314 人	100%

「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる」活動が必要な理由として、約 30%の教員が「生徒が興味・関心を示す」を理由として挙げており、それに引き続き「生徒の英語力・理解力が十分である。」や「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)」、「入試に必要である」の順に理由として多く挙げられている。また、その他の理由として「必要」がキーワードとしてよく使われている。

表 138. 【項目 130】「行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っていない理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分でない。	88 件	32.8%
生徒が興味・関心を示さない。	36 件	13.4%
教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。	34 件	12.7%
学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。	12 件	4.5%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。	37 件	13.8%
自分の英語力が不足している。	14 件	5.2%
どのように教えれば良いか分からない。	24 件	9.0%
入試に対応していない。	10 件	3.7%
その他(具体的に)	13 件	4.9%
<ul style="list-style-type: none"> ・決められたシラバスの内容をこなすためには、時間上の制約があるため、行うのが難しい。 ・ライティングやネイティブの先生の表現の時間が別に設定されているため ・与えられた課題による「伝えたい内容」です。生徒自身が本当に伝えたいという気持ちにするのは困難です。 ・日本語でも能力の劣る生徒がいるので、まずは日本語から行っている。 ・時間がない ・時間不足 ・時間の確保 ・教科書にライティング機会が、ほとんどないため。 ・そのために時間を割く余裕がない ・授業時間が足りない ・ようやく自己紹介文が書ける程度。 ・今後やるつもり ・ALT が常駐でないので、すべて自分で添削することになり、十分なフィードバックをしようとすると時間的に無理がある。 		
全回答	268 件	100%

「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる」活動を行わない理由で最も多かったのは「生徒の英語力・理解力が十分でない」であり、理由全体の全体の約 3 分の 1 程度となっている。「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)」がその次に多く、「生徒が興味・関心を示さない」が続いている。その他として「時間がない」ことが理由として挙げられている。

表 139. 【項目 131】「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた統合的な活動をする。」の実施度

実施度	全く行っていない	あまり行っていない	ときどき行っている	常に行っている	全回答者
回答者数	21 人	59 人	123 人	68 人	271 人
全体に占める割合	7.7%	21.8%	45.4%	25.1%	100%

「(常に・ときどき)行っている」と回答した教員が 7 割以上と多い。その中で「常に行っている」という教員が約 25%を占めている。一方、「(全く・あまり)行っていない」と回答した教員は 3 割程度であった。

表 140. 【項目 132】「行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っている理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分である。	60 人	13.9%
生徒が興味・関心を示す。	111 人	25.8%
教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。	21 人	4.9%
学習指導要領通りに教えることが大切である。	29 人	6.7%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。	72 人	16.7%
自分の英語力に自信がある。	9 人	2.1%
関連する指導法や教授法などを学んだことがある。	68 人	15.8%
入試に必要である。	35 人	8.1%
その他(具体的に)	26 人	6.0%
<ul style="list-style-type: none"> ・実際の場面では統合された力が必要となってくるため ・4 技能を使う活動は変化が付けやすく、英語力定着に相乗効果がある。頻繁に実施しているがなかなか「常に」とは言えない。高 ・1では2時間でコミュニケーション英語の教科書を扱っているので時間的なやりくりが大変である。 ・必要だから ・その単元のまとめとして。 ・受験だけでなく、グローバルな社会で活躍できる人間に育てて欲しいので ・生徒にとって必要だから ・英語力 up に欠かせないから ・4技能統合型の活動は言うまでもなく重要であるから。選択肢に「生徒の総合的英語力が伸びると考えるから」を入れてください。 ・4 技能を関連させて育成する方法として ・必要だと思うから ・必要だから ・英語力向上に効果があると思うから。 ・実際にそうした力が必要だから。 ・生徒の実用的な英語力を育成するため。 ・コミュニケーションはそうあるべきだと思います。 ・技能統合が生徒の英語力の向上に寄与すると考えているから ・そうあるべきだから ・できるだけ日本語を介さない回路を使用することをうながすため ・統合的に指導することにより、学習効果が上がるので ・自身の留学経験から ・4技能が伸びないと英語を使う力は伸びないから。(リスニングだけは点が取れる。は英語力があると言えるか?) ・4技能をフルに使って、1つのことを繰り返し学習することで習得を促進することができると思うから ・英語授業として当たり前のことである ・4技能バランスよくやりたいから ・質問の内容がどのレベルに対してのものか不明ですが、授業で4技能が取り入れられるのはネイティブとの TT のおかげです ・生徒の英語力向上に役立つから 	431 人	100%
全回答	431 人	100%

「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた統合的な活動をする。」と回答した理由の中で割合の高いものから順に挙げると、「生徒が興味・関心を示す」、「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)」、「関連する指導法や教授法などを学んだことがある」、「生徒の英語力・理解力が十分である」となった。逆に行っている理由として割合の低いもの順に列記すると、「自分の英語力に自信がある」、「教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)」、「学習指導要領通りに教えることが大切である」、「入試に必要である」の順であった。また、「その他(具体的に)」の理由は 26 件に上り、「必要」というキーワードが目についた。

表 141. 【項目 133】「行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っていない理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分でない。	35 件	22.0%
生徒が興味・関心を示さない。	14 件	8.8%
教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。	26 件	16.4%
学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。	11 件	6.9%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。	26 件	16.4%
自分の英語力が不足している。	8 件	5.0%
どのように教えれば良いか分からない。	25 件	15.7%
入試に対応していない。	9 件	5.7%
その他(具体的に)	5 件	3.1%
<ul style="list-style-type: none"> ・英会話の授業では扱えない ・時間に余裕がありません。 ・時間不足 ・授業時間が足りない ・先輩の先生に合わせるため。 		
全回答	159 件	100%

「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた統合的な活動をする」ことに関して、そのような活動を行っていない理由としては、「生徒の英語力・理解力が十分でない」と回答した教員が最も多く、5 名中 1 名程度の割合を占めた。教員に直接かかわる理由としては、4 技能を統合した活動は「教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)」、「どのように教えれば良いか分からない」、「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)」のように負担や教え方に関する理由も少なくはなかった。しかし、「生徒が興味・関心を示さない」、「学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である」、「自分の英語力が不足している」、「入試に対応していない」はそれぞれ理由全体の 10% 以下であり、このようなことは活動を実施していない主な理由ではないようである。「その他(具体的に)」の理由は少なく、5 件に留まり、内 3 件は「時間不足」を挙げている。

表 142. 【項目 134】「授業は基本的に英語で行う。」の実施度

実施度	全く行っていない	あまり行っていない	ときどき行っている	常に 行っている	全回答者
回答者数	22 人	55 人	120 人	74 人	271 人
全体に占める割合	8.1%	20.3%	44.3%	27.3%	100%

「ときどき行っている」と回答した教員が最も多く、「常に行っている」と回答した教員と合わせると 7 割程度の教員が「(常に・ときどき)行っている」と回答した。一方、「全く行っていない」と回答した教員は 1 割未満に留まっていた。

表 143. 【項目 135】「行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っている理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分である。	75 件	17.1%
生徒が興味・関心を示す。	125 件	28.6%
教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。	24 件	5.5%
学習指導要領通りに教えることが大切である。	29 件	6.6%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。	42 件	9.6%
自分の英語力に自信がある。	34 件	7.8%
関連する指導法や教授法などを学んだことがある。	64 件	14.6%
入試に必要なである。	14 件	3.2%
その他 (具体的に)	30 件	6.9%
<ul style="list-style-type: none"> ・英語を英語で教える方が効率的なため ・日本は日常生活で英語を聴いたり、話したりする環境でないからこそ、なるべく生徒に英語に触れる機会を与えらるべきだと思う。私が高校生の時から「訳読形式の授業でなく、英語は英語で教えるべき」という議論があった。せっかく指導要領が変わったのだから、どんどん実践したい。 ・限られた授業時間の中で少しでも多く英語に触れさせたい。 ・時間中に必ず使うが、100%ではない。英語に慣れる、怖がらない、雰囲気を作るため。 ・英語を使おうとするようになる ・に英語を使うことは必要だから ・英会話の授業なので ・本当に簡単な指示文だけですが。 ・説明を多くすると集中して聞くので、ついそれに頼ってしまう ・学校の教育方針がそのようになっている ・生徒にとって必要だと思うから ・生徒に英語を話させることが主であるから ・生徒にとって日本件教員がロールモデルを示すことは大変重要だから。すべての活動の基準は「生徒の英語力が伸びるか伸びないか」です。学習指導要領のために行っているわけでも、教科書のために行っているわけでも、自分の英語力に自信があるから行っているわけでもありません。選択肢を再検討してください。 ・必死に取り組みますが指示が通らないことも多くあります。 ・新しい学習指導要領に明記される見込みで、生徒が今後、高校で学習する時に有益であると考えるから ・そうするようにという強制感に苛まれるから ・英語を話すこと、聞くことの楽しさを伝えたいため ・英語になれるため ・実際に言語が使用される場面に触れることや、実際に使用されている英語のインプットが必要だから ・中学は英語で、高校は日本語で行っています。 ・その方が上達すると思います。 ・英語での生徒の発話が多くなる ・生徒のロールモデルとして必要 ・学校の方針 ・できる限り英語に触れさせる機会を増やすことは重要だと考えているので ・常に授業の中で英語を使って指導するが、すべて英語で行うわけではない。中1に英語だけは厳しいので、日本語も加える部分がある。 ・英語と日本語は必要に応じてスイッチした方が効果的である、ということは、世界の第二言語習得の場でも検証されてきていると聞きます。吉田先生の御著書に、おいても BICS と CALP で母国語と第二言語での指導法が述べられていました ・英語の授業ですから ・基本ネイティブが英語で説明した後、文法など補足説明は日本語でしている ・意味のあることを英語で聞くことが生徒に必要なと感じるから 		
全回答	437 件	100%

「生徒が興味・関心を示す」、「生徒の英語力・理解力が十分である」に次いで、「関連する指導法や教授法などを学んだことがある」と回答した教員が多い。

表 144. 【項目 136】「行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を 3 つまで)」の記述統計

行っていない理由	回答件数	全体に占める割合
生徒の英語力・理解力が十分でない。	44 件	27.7%
生徒が興味・関心を示さない。	14 件	8.8%
教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。	15 件	9.4%
学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。	10 件	6.3%
教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。	16 件	10.1%
自分の英語力が不足している。	24 件	15.1%
どのように教えれば良いか分からない。	8 件	5.0%
入試に対応していない。	17 件	10.7%
その他(具体的に)	11 件	6.9%
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒がろうだから ・先輩の先生に合わせるため。 ・まずは理解することが何より大切であり、そのために母語を活用することは必須であるため ・新課程 1 年目で手探り状態である。また、英語だけの授業では理解できない生徒の英語嫌いを加速させる。 ・一貫校ということもあり、必修授業では学力差が大きいことが問題だが、可能な範囲では取り組んでいる。 ・英語では伝えられない、日本語のほうが伝わりやすいこともあるから(効果的な学習方法・アクティビティのやり方など) ・教科書が英語で進められるように作成されていないため。 ・生徒の理解度を高めることが先決であり、生徒に英語を使わせる機会を増やすことでカバーできると考えているから ・新たな内容等に関してのことが多く、日本語で説明が必要な場合が多いので。 ・指示は英語でできても、文法は英語で説明しても・・・まだ中2なので。 ・必要性を感じていない 		
全回答	159 件	100%

「生徒の英語力・理解力が十分でない」が行っていない理由で最も多かった。「自分の英語力が不足している」との回答が 2 番目に多く、授業を英語で実施するにあたっては、生徒の英語力・理解力だけでなく、教員の英語力も要因になっているということが明らかになった。

表 145. 「かなり頻繁に行っている」の回答率を基準とした実践度順

順位	項目	%
1	【項目 134】「授業は基本的に英語で行う」	27.3
2	【項目 122】「英語を読んで書き手の意向などを理解させる」	26.2
3	【項目 131】「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた統合的な活動をする」	25.1
4	【項目 116】「英語を聞いて話し手の意向などを理解させる」	20.3
5	【項目 125】「英語を用いて自分の考えなどを書かせる」	16.6
6	【項目 119】「英語で自分の考えなどを話させる」	16.2
7	【項目 128】「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる」	10.7

表 123 の重要度順で最下位であった【項目 134】「授業は基本的に英語で行う」が実践度順では最上位であった。【項目 122】「英語を読んで書き手の意向などを理解させる」リーディング活動は、【項目 116】「英語を聞いて話し手の意向などを理解させる」リスニング活動や【項目 125】「英語を用いて自分の考えなどを書かせる」ライティング活動、【項目 119】「英語で自分の考えなどを話させる」スピーキング活動より実践度は高く、同様な傾向は重要度にもすでに見られていた。【項目 131】「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた

統合的な活動をする」の重要度は最上位であったが、実践度は3番目であった。【項目128】「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる」は重要度も6番目と低かったが、実践度も同様に低く最下位であることが判明した。

表146. 実践度に関する7項目の「行っている理由」の総件数順

順位	理由	件数
1	「生徒が興味・関心を示す」	815
2	「生徒の英語力・理解力が十分ある」	477
3	「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)」	451
4	「関連する指導法や教授法などを学んだことがある」	330
5	「入試に必要である」	303
6	「その他(具体的に)」	169
7	「教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)」	159
8	「学習指導要領通りに教えることが大切である」	154
9	「自分の英語力に自信がある」	111

「行っている理由」としては、「生徒が興味・関心を示す」が圧倒的に多い。次に多い理由も生徒に関する「生徒の英語力・理解力が十分ある」となっている。これらに引き続く理由は、「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)」や「関連する指導法や教授法などを学んだことがある」のように教える際の手段に関わるものであった。「入試に必要である」は担当学年によって異なる可能性が高いが、本調査では5位であった。「その他(具体的に)」や「教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)」、「学習指導要領通りに教えることが大切である」は5位の半分程度に下がっている。最も件数の少ない理由は「自分の英語力に自信がある」であり、多くの場合、教師の英語力の自信によって実践する活動が決まるわけではなさそうである。

表147. 実践度に関する7項目の「行っていない理由」の総件数順

順位	理由	件数
1	「生徒の英語力・理解力が十分でない」	341
2	「教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)」	209
3	「教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)」	154
4	「生徒が興味・関心を示さない」	117
5	「どのように教えれば良いか分からない」	105
6	「自分の英語力が不足している」	83
7	「入試に対応していない」	76
8	「学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である」	74
9	「その他(具体的に)」	54

「生徒の英語力・理解力」と「教科書など、現在使用している教材との兼ね合い(教材の難易度、内容など)」は「行っている理由」と同様に件数が多かった。しかし、「教員の負担(授業準備に時間・手間がかかるなど)」は、「行っている理由」が7位であったが、「行っていない理由」では3位に上昇し、また、「自分の英語力」も9位から6位へと順位を上げており、教員自身の要因が「行っていない理由」としてより多く挙がっている。逆に、

「生徒の興味・関心」は、1位から4位へと順位を下げている。この他の「行っていない理由」は「行っている理由」とほぼ変わらない順位にあると言える。

3.1.2 項目間の関係の分析結果

3.1.2.1 英語の活動や指導の重要度と実施度の関係

表 148. 英語の活動や指導の重要度と実施度の差:中学校*

英語の活動や指導	項目番号*	平均値	標準偏差	t値	有意確率** (効果量 (d***)
英語を聞いて話し手の意向などを理解させる。	109 (重要度)	3.56	0.58	9.44	.000 (1.01)
	116 (実施度)	2.91	0.70		
英語で自分の考えなどを話させる。	110 (重要度)	3.55	0.67	11.60	.000 (1.23)
	119 (実施度)	2.63	0.82		
英語を読んで書き手の意向などを理解させる。	111 (重要度)	3.56	0.62	8.59	.000 (0.89)
	122 (実施度)	2.94	0.77		
英語を用いて自分の考えなどを書かせる。	112 (重要度)	3.52	0.66	9.04	.000 (0.99)
	125 (実施度)	2.81	0.77		
伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる。	113 (重要度)	3.46	0.70	15.39	.000 (1.45)
	128 (実施度)	2.34	0.84		
「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた活動をする。	114 (重要度)	3.58	0.69	8.62	.000 (0.85)
	131 (実施度)	2.91	0.87		
授業は基本的に英語で行う。	115 (重要度)	2.94	0.76	1.34	.181
	134 (実施度)	2.84	0.91		

* N= 126

**Bonferroni の補正により棄却値を 0.7% (5%÷7)とする

***効果量 小(0.20) 中(0.50) 大(0.80)

「授業は基本的に英語で行う」を除く6つの内容の重要度と実施度の間には統計的に有意な大きな差があり、重要度が実施度よりも高かった。最も差が大きかったのは「伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる」(d = 1.45)で、1点以上の差があった。一方、「授業は基本的に英語で行う」の重要度は最も低かったものの、実施度は7つの項目中4番目に高く、両者の間に統計的に有意な差は見られなかった。

表 149. 英語の活動や指導の重要度と実施度の相関関係:中学校*

英語の活動や指導【重要度項目番号/実施度項目番号】	相関係数	有意確率**
英語を聞いて話し手の意向などを理解させる。【109/116】**	.31	.00
英語で自分の考えなどを話させる。【110/119】	.31	.00
英語を読んで書き手の意向などを理解させる。【111/122】	.35	.00
英語を用いて自分の考えなどを書かせる。【112/125】	.26	.00
伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる。【113/128】	.45	.00
「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた活動をする。【114/131】	.41	.00
授業は基本的に英語で行う。【115/134】	.56	.00

* $N = 126$

**Bonferroni の補正により棄却値を 0.7% ($5\% \div 7$)とする

7 ペアの相関係数は $r = .26 \sim .56$ であり、弱い相関から中程度の相関があった。最も強い相関は「授業は基本的に英語で行う。」($r = .56$)であり、最も弱い相関は「英語を用いて自分の考えなどを書かせる。」($r = .26$)であった。

表 150. 英語の活動や指導の重要度と実施度の相関関係: 高等学校*

アンケート項目ペア共通内容【重要度項目番号/実施度項目番号】	相関係数	有意確率
英語を聞いて話し手の意向などを理解させる。【109/116】	.30	.00
英語で自分の考えなどを話させる。【110/119】	.35	.00
英語を読んで書き手の意向などを理解させる。【111/122】	.36	.00
英語を用いて自分の考えなどを書かせる。【112/125】	.37	.00
伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる。【113/128】	.46	.00
「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた活動をする。【114/131】	.37	.00
授業は基本的に英語で行う。【115/134】	.56	.00

* $N = 226$

7 ペアの相関係数は $r = .30 \sim .56$ であり、中学校と同様に弱い相関から中程度の相関があった。最も強い相関があったのは中学校と同様に「授業は基本的に英語で行う。」($r = .56$)であった。一方、最も弱い相関があったのは「英語を聞いて話し手の意向などを理解させる。」($r = .30$)であった。

3.1.2.2 平成 27 年度「英語教育実施状況調査」の結果と本研究の結果の関係

本研究の特徴の一つとして、今回の調査の回答者の多くの勤務校が首都圏または近辺地域に集中していた。これを踏まえて文部科学省(2015)「平成 27 年度「英語教育実施状況調査」の結果」と本研究の分析結果を照らし合わせてみることで興味深い対比が示された点について、ここに示す。文部科学省の調査では、「英語の授業を 50%以上英語で教えている教員の割合」は、関東4県（東京、埼玉、千葉、神奈川）の中学校の教員においては、3年間の平均が東京 69.5%、埼玉 72.8%、千葉 60.8%、神奈川 59.8%、高校においては、東京 53.3%、埼玉 29.6%、千葉 44.4%、神奈川 45.8%であった。それに対し、関西 4 県（大阪、兵庫、京都、奈良）は、中学においては、大阪 26.3%、兵庫 46.9%、京都 43.9%、奈良 26.3%、高校においては、大阪 25.3%、兵庫 82%、京都 34%、奈良 32.7% のように、関東に比べ関西の方が低いことが報告されている。

本研究においては関西の教員の回答数が非常に少なかったため、中学、高校、そして中高一貫をまとめて分析したところ、項目 19「現在の勤務校の受験勉強に対する学校としての意識」と項目 134「授業は基本的に英語で行う」の実施度には、負の相関（ $\rho = -.43, p = .01$ ）が見られ、項目 19「現在の勤務校の受験勉強に対する学校としての意識」と項目 115「授業は基本的に英語で行う」の重要度にも弱い負の相関（ $\rho = -.21, p = .26$ ）が見られた。そして、項目 115「授業は基本的に英語で行う」の意識と項目 134「授業は基本的に英語で行う」の実施度には強い相関（ $\rho = .65, p = .00$ ）が見られた。このことは、本調査に協力した（兵庫県を除く）関西圏の中高教員で進学に対する意識の高いいわゆる「進学校」に勤務する教員に限って、「授業は基本的に英語で行う」べきだとの理念を持つこと、また実施する傾向がみられないことが明確となった。しかし、関西の中でも高校の授業において英語使用の意識と実践の高さが全国の中でも著しく高かった兵庫県が良い例であるが、「授業は基本的に英語で行う」べきだという理念を持つ教員は、それを実施する傾向が強いということも明らかとなった。

さらに、文部科学省（2015）の調査において、中学校においては秋田県（89.8%）や石川県（81.4%）、香川県（78.6%）、高校においては岩手県（85.3%）、山梨県（84.8%）、兵庫県（82.0%）など過半数以上の教員が英語の授業を英語で行っている県があることが報告されている。本研究の調査では首都圏の回答者が多数を占めるため、上記のような英語使用に積極的な教員の比率が高い県での結果が全体に反映されていないことが相関の低い要因となっているとも考えられる。しかし、本研究のアンケートに回答した教員のうち英語使用に積極的な教員の比率が最も高かった栃木県（72.4%）や岐阜県（77.3%）、埼玉県（72.8%）の中学教員の回答を取り出して分析してみた結果、「授業は基本的に英語で行う」の重要度と実施度には強い相関（ $\rho = 0.63, p = .09$ ）が見られた。さらに、同じく本研究のアンケートに回答した教員のうち英語使用に積極的な教員の比率が最も高かった岩手県（85.3%）や山梨県（84.8%）、兵庫県（82.0%）の高校教員の回答を取り出して分析してみた結果、ここでは「授業は基本的に英語で行う」の重要度と実施度には相関（ $\rho = 0.15, p = .74$ ）が見られなかった。

しかし一方で、英語を使った授業の実施度が高いと報告された栃木県、岐阜県、埼玉県の中教員においては、「進学校であること」と「授業は基本的に英語で行う」ことの重要度との相関は全く見られず（ $\rho = -0.01, p = .97$ ）、さらに「進学校であること」と英語での授業の実施度との間には相関がほぼ見られなかった（ $\rho = 0.14, p = .74$ ）。また、中学と同様に英語を使った授業の実施度が高いと報告された岩手県、山梨県、兵庫県の高校教員においては、「進学校であること」と「授業は基本的に英語で行う」ことの重要度との相関が見られ（ $\rho = 0.45, p = 0.31$ ）、さらに「進学校であること」と英語での授業の実施度との間には弱い相関が見られた（ $\rho = 0.39, p = 0.38$ ）。

さらなる分析として、中学において文部科学省の調査にて英語を使った授業の実施度が高い県（香川県、岐

阜県、埼玉県)と実施度が低い府県(奈良県、大阪府、島根県)の間で、「英語で授業を行う」重要度と、実施度、そして「受験に対する意識」の3つの項目それぞれにおいてどのような差があるかを調べるため、マン・ホイットニーの検定を行った。文部科学省の調査にて、英語を使った授業の実施度が高かった県と低かった県の、本研究調査での重要度の記述統計の結果は表151のように、そして実施度の記述統計結果は表152のようになった。「英語で授業を行う」重要度に関しては、栃木県、岐阜県、埼玉県の平均は3.12、奈良県、大阪府、島根県の平均は2.00であり、ここでは平均点の差には有意差が見られた($U = 3.00, p = .05$)。本研究のアンケートでは、回答がされなかった県があったため、文部科学省の調査と正確な比較はできなかったが、この数値は本研究の調査において、3県の教員のほうが「英語で授業を行う」ことの重要度が高いとの認識を持っていることを示したものであった。しかし、「英語で授業を行う」実施度に関しては、有意な差は見られなかった。

表 151. 英語を使った授業の実施度別の【項目 115】「授業は基本的に英語で行う」の重要度 (中学)

実施度の高低別	度数	平均値	標準偏差
実施度の高い県	8	3.12	0.83
実施度の低い県	3	2.00	0.00

表 152. 英語を使った授業の実施度別の【項目 134】「授業は基本的に英語で行う」の実施度 (中学)

実施度の高低別	度数	平均値	標準偏差
実施度の高い県	8	3.12	0.99
実施度の低い県	3	2.33	0.57

一方、高校において文部科学省の調査にて英語を使った授業の実施度が高い県(岩手県、山梨県、兵庫県)と実施度が低い府県(和歌山県、大阪府、島根県)の間で、「英語で授業を行う」重要度と、実施度、そして「受験に対する意識」の3つの項目それぞれにおいてどのような差があるかを調べるため、マン・ホイットニーの検定を行った。文部科学省の調査で英語を使った授業の実施度が高かった県と低かった県に現在勤務している本調査の回答者の重要度に関する記述統計の結果は表153、そして、実施度に関する記述統計の結果は表154のようになった。「英語で授業を行う」重要度に関しては、岩手県、山梨県、兵庫県の平均は3.56、和歌山県、大阪府、島根県の平均は3.00であり、平均点の差にも有意差が見られなかった($U = 44, p = .22$)。文部科学省の調査には見られなかった新しい発見として、実施度の高い3県の教員と実施度の低い3県の教員の「英語で授業を行う」ことへの実施度は同等であることが分かった($U = 60.5, p = .87$)。

表 153. 英語を使った授業の実施度別の【項目 115】「授業は基本的に英語で行う」の重要度 (高校)

実施度	度数	平均値	標準偏差
実施度の高い県	7	3.56	0.53
実施度の低い県	18	3.00	1.02

表 154. 英語を使った授業の実施度別の【項目 134】「授業は基本的に英語で行う」の実施度(高校)

実施度	度数	平均値	標準偏差
実施度の高い県	7	3.14	0.89
実施度の低い県	18	3.00	1.08

3.2 研究課題2の分析結果

表 155. 英語教育の理念や目的への賛成度の経年変化:中学校*

英語教育の理念や目的	実施年度	平均値	標準偏差	t値	有意確率** (効果量(d***)
【22】実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう。	2015	3.33	1.08	-0.85	.391
	2003	3.43	1.07		
【23】実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけでなく、読み、書く能力もさす。	2015	4.51	0.71	2.80	.006
	2003	4.29	0.84		
【24】海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。	2015	4.06	1.02	0.10	.918
	2003	4.05	0.83		
【25】国際社会に生きる日本人として、世界の人々と強調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の育成が必要である	2015	4.52	0.76	0.06	.949
	2003	4.51	0.65		
【26】英語を実践的に使うことが出来なければ日本及び日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう。	2015	3.63	1.07	0.62	.534
	2003	3.57	0.95		
【30】中学卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない。	2015	4.04	0.76	3.03	.003
	2003	3.80	0.82		
【32】高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない。	2015	4.00	0.85	2.34	.020
	2003	3.80	0.81		
【33】高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない。	2015	4.02	0.86	3.09	.002 (0.33)
	2003	3.75	0.79		
【34】英語を入試などのテストに合格するために指導することは重要である。	2015	3.67	0.91	4.73	.000 (0.49)
	2003	3.19	0.99		
【35】生徒が英語を好きになるように指導することは重要である。	2015	4.62	0.69	-1.83	.068
	2003	4.74	0.58		
【36】生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である。	2015	4.66	0.59	-2.50	.013
	2003	4.81	0.48		
【37】英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である。	2015	4.67	0.63	0.99	.321
	2003	4.60	0.63		
【38】英語を学ぶことにより、生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である。	2015	3.79	0.86	1.25	.210
	2003	3.69	0.82		

*2015年データ N=126 / 2003年データ N=395

***Bonferroniの補正により棄却値を0.3% (5%÷13)とする

***効果量 小(0.20) 中(0.50) 大(0.80)

表 155 にあるように、2003 年の調査と今回の調査に共通する 13 項目中、2 つの項目、項目 33・34 において統計的に有意な差が見られ、効果量は小から中程度であり、2003 年より 2015 年の方が高い値となった。一方、Bonferroni の補正により統計的に有意な差ではないものの、項目 36「生徒が英語を使って積極的にコミュニケー

ションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である。」の賛成度は2003年より2015年の方が低い値となっている。

表 156. 英語教育の理念や目的への賛成度の経年変化: 高等学校*

英語教育の理念や目的	実施年度	平均値	標準偏差	t値	有意確率** (効果量(<i>d</i> ***))
【22】実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう。	2015	3.23	1.18	-0.57	.563
	2003	3.28	1.15		
【23】実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけでなく、読み、書く能力もさす。	2015	4.58	0.68	2.04	.041
	2003	4.45	0.83		
【24】海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。	2015	3.94	1.03	1.91	.056
	2003	3.78	0.98		
【25】国際社会に生きる日本人として、世界の人々と強調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の育成が必要である	2015	4.54	0.73	2.52	.012
	2003	4.38	0.72		
【26】英語を実践的に使うことが出来なければ日本及び日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう。	2015	3.78	1.08	2.46	.014
	2003	3.57	0.98		
【30】中学卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない。	2015	4.01	0.98	3.71	.000 (0.31)
	2003	3.71	0.96		
【32】高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない。	2015	4.00	0.92	3.58	.000 (0.30)
	2003	3.72	0.94		
【33】高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない。	2015	4.00	0.90	4.33	.000 (0.36)
	2003	3.67	0.93		
【34】英語を入試などのテストに合格するために指導することは重要である。	2015	3.72	1.01	4.17	.000 (0.35)
	2003	3.37	0.99		
【35】生徒が英語を好きになるように指導することは重要である。	2015	4.61	0.72	-0.56	.570
	2003	4.64	0.56		
【36】生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である。	2015	4.63	0.68	-1.13	.256
	2003	4.69	0.54		
【37】英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である。	2015	4.66	0.63	-0.51	.606
	2003	4.69	0.56		
【38】英語を学ぶことにより、生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である。	2015	3.93	0.90	2.68	.007
	2003	3.73	0.87		

*2015年データ $N=226$ / 2003年データ $N=386$

***Bonferroniの補正により棄却値を0.3% ($5\% \div 13$)とする

***効果量 小(0.20) 中(0.50) 大(0.80)

表 156 は高等学校の教員の意識であるが、項目 30・32・33・34 で 2003 年より 2015 年の方が平均値がより高

く、項目 33・34 は中学校と同じ傾向である。平均値が下がった項目の中では、中学校と同様に、項目 36「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である。」の低下が一番大きかったが、統計的な有意な差ではなく、ほぼ同等の値であったと言える。

表 157. 英語の活動や指導の実施度の経年変化: 中学校*

英語の活動や指導	実施年度	平均値	標準偏差	t値	有意確率** (効果量(d)***)
【49】実際に英語を使用してお互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行わせる。	2015	3.13	0.78	-0.75	.451
	2003	3.18	0.69		
【50】生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用して指導する。	2015	3.33	0.78	0.05	.956
	2003	3.33	0.61		
【51】生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用して指導する。	2015	2.66	0.97	4.03	.000 (0.47)
	2003	2.28	0.76		
【52】学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れて指導する。	2015	3.56	0.71	-0.45	.650
	2003	3.59	0.55		
【53】伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる。	2015	2.71	0.82	0.22	.826
	2003	2.69	0.68		
【54】聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる。	2015	2.63	0.87	-0.94	.348
	2003	2.72	0.76		
【55】多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ教材を使う。	2015	2.69	0.77	-1.31	.188
	2003	2.79	0.72		
【56】世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つ教材を使う。	2015	2.83	0.79	-1.88	.061
	2003	2.98	0.62		
【57】言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う。	2015	3.43	0.66	2.87	.004
	2003	3.24	0.64		
【58】強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れさせ、正しく発音させる。	2015	3.48	0.65	0.43	.667
	2003	3.45	0.63		
【59】文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書かせる。	2015	3.21	0.70	-4.59	.000 (0.47)
	2003	3.52	0.65		
【60】家庭生活、学校での学習や活動、地域の行事など生徒の身近な暮らしにかかわる場面を取り上げた言語活動をさせる。	2015	2.90	0.74	-2.95	.003 (0.31)
	2003	3.11	0.66		
【61】辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるように指導する。	2015	2.75	0.87	-0.25	.799
	2003	2.77	0.78		
【62】話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解させる。	2015	2.75	0.79	-1.32	.188
	2003	2.86	0.68		

英語の活動や指導	実施年度	平均値	標準偏差	t値	有意確率** (効果量(d)***)
【63】質問や依頼などを聞いて適切に応じさせる。	2015	3.02	0.81	-5.18	.000
	2003	3.36	0.58		(0.53)

*2015年データ N=126 / 2003年データ N=395

**Bonferroniの補正により棄却値を0.3% (5%÷15)とする

***効果量 小(0.20) 中(0.50) 大(0.80)

表157では15項目のうち4項目に変化が見られた。項目51に見られる実施度の変化は、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器が発達し、LL教室にとって代わりCALL環境などが普及したためのように思われる。項目57に関しては、文法指導の実施度が単に高まったというよりは、文法指導を従来のように説明中心に行うのではなく、言語活動を伴いながら実施するようになってきたことを反映した結果のように推察される。他方、項目59・60・63は実施度が以前に比べて下がっている項目である。表155の項目34「英語を入試などのテストに合格するために指導することは重要である」の値が高まっていることを前述したが、項目59・60・63の活動は現在実施されているテストではあまり出題されてない活動であるため、このような結果となったのではなかろうか。

表158. 英語の活動や指導の実施度の経年変化: 高等学校*

英語の活動や指導	実施年度	平均値	標準偏差	t値	有意確率** (効果量(d)***)
【74】広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協定の精神を養う。	2015	2.98	0.76	-0.48	.632
	2003	3.01	0.73		
【75】世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む。	2015	3.08	0.72	-2.65	.008
	2003	3.23	0.63		
【76】生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える。	2015	3.14	0.74	-3.97	.000
	2003	3.38	0.70		(0.34)
【78】ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れ指導する。	2015	3.35	0.77	0.91	.358
	2003	3.30	0.75		
【79】文型・文法の解説をする。	2015	3.36	0.69	-3.44	.001
	2003	3.55	0.62		(0.29)
【82】読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる。	2015	3.40	0.70	1.25	.209
	2003	3.32	0.83		
【83】目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる。	2015	3.33	0.73	7.03	.000
	2003	2.83	0.99		(0.55)
【87】聞いた内容について、概要や要点を書かせる。	2015	2.72	0.85	9.95	.000
	2003	2.01	0.85		(0.84)
【94】より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする。	2015	2.69	0.82	6.87	.000
	2003	2.19	0.94		(0.56)
【97】場面やことばの働きを設定して書かせる。	2015	2.47	0.86	5.63	.000
	2003	2.05	0.88		(0.48)

英語の活動や指導	実施年度	平均値	標準偏差	t値	有意確率** (効果量(<i>d</i> ***))
【99】幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考え、意見交換する)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)させる。	2015	2.22	0.93	7.11	.000 (0.61)
	2003	1.69	0.82		
【100】リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら話させる。	2015	2.88	0.80	-6.97	.000 (0.60)
	2003	3.34	0.75		

*2015年データ $N = 226$ / 2003年データ $N = 386$

***Bonferroniの補正により棄却値を0.4% ($5\% \div 12$)とする

***効果量 小(0.20) 中(0.50) 大(0.80)

表 158 が示すように、高等学校では 12 の共通項目中 8 項目で英語の活動や指導の実施度が統計的に有意に異なっていた。まず、項目 75・76・79 は実施度が低下した項目である。項目 75 は世界や我が国の生活や言語、文化に関する態度の育成についてであるが、これも受験にはあまり関係していないためか、若干低下している。一番低下の度合いが高いものは項目 79 で、文型・文法を明示的に説明するという指導はかなり減ってきているようである。一方、項目 83・87・94・97・99 は実施度が高まった活動である。特に項目 87「聞いた内容について、概要や要点を書かせる」という統合技能の活動が増えている。また、項目 83・87・97 に見られるように、単に読んだり書いたりするのではなく、目的や状況に応じた適切な指導が増えているようである。項目 99 はかなり高度な活動であり、2003 年時点では実施度は低かったが、今回の調査では、未だ頻繁に実施されてはいないものの、より多く実施されるようになってきていることが判明した。

3.3 理念と実践の関連性

3.1.2.1 では、中学校、高等学校共に、項目 115・134「授業は基本的に英語で行う」において英語の活動や指導の重要度と実施度の相関係数が最も高かったことを報告した。その要因を掘り下げるため、「授業は基本的に英語で行う」ことに対する重要度と実施度それぞれを、アンケートに回答した教員の年代毎に一元配置分散分析を行った。重要度と実施度それぞれの記述統計の結果は表 159・160、分散分析の結果は表 161・162 に示した通り、両者とも有意差が見られる結果となった。

表 159. 【項目 115】「授業は基本的に英語で行う」の年代別の重要度

年代	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
20代	41	2.68	0.90	0.14	2.39	2.96	1	4
30代	73	2.95	0.78	0.09	2.77	3.14	1	4
40代	62	3.14	0.69	0.08	2.96	3.32	2	4
50代	84	3.02	0.77	0.08	2.85	3.19	1	4
60代	11	3.09	0.70	0.21	2.62	3.56	2	4
全回答者	271	2.98	0.78	0.04	2.89	3.07	1	4

表 160. 【項目 134】「授業は基本的に英語で行う」の年代別の実施度

年代	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
20代	41	2.53	1.00	0.15	2.22	2.85	1	4
30代	73	2.90	0.88	0.10	2.69	3.11	1	4
40代	62	3.03	0.74	0.09	2.84	3.22	1	4
50代	84	3.01	0.89	0.09	2.81	3.20	1	4
60代	11	2.81	0.98	0.29	2.15	3.47	1	4
全回答者	271	2.90	0.89	0.05	2.80	3.01	1	4

表 161. 【項目 115】「授業は基本的に英語で行う」の年代別の重要度の一元配置分散分析

重要度	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	5.63	4	1.48	2.30	.05
グループ内	162.31	266	0.61		
合計	167.94	270			

表 162. 【項目 134】「授業は基本的に英語で行う」の年代別の実施度の一元配置分散分析

実施度	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	7.61	4	1.90	2.44	.04
グループ内	207.08	266	0.77		
合計	214.69	270			

さらに、重要度、実施度について、どの年代間で差が見られたのかを検証するために、多重比較 (Tukey HSD) を行った。その結果は、表 163 で見られる通り、重要度に関しては、40代と20代の間意識の差が見られること

が分かった。40代（平均値 = 3.14）は、「授業は基本的に英語で行う」ことへの重要性をどの年代よりも重く認識している。その一方で、20代（平均値 = 2.68）は、重要性を認識している教員数が最も低かった。このような意識の差は、実施度にも見られ、20代（平均値 = 2.53）は、40代（平均値 = 3.03）と50代（平均値 = 3.01）の教員間にも差が見られた。

表 163. 【項目 115・134】「授業は基本的に英語で行う」の重要度と実施度の多重比較

従属変数	(I) 年齢	(J) 年齢	(I-J) 平均値の差	標準誤差	有意確率	95%信頼区間	
						下限	上限
重要度	40代	20代	0.46*	0.15	0.02	0.03	0.89
実施度	40代	20代	0.49*	0.17	0.04	0.00	0.98
	50代	20代	0.47*	0.16	0.04	0.01	0.93

*. 平均値の差は 0.05 水準で有意を示す。

学習指導要領の変遷に伴い、最もコミュニカティブな英語教育に慣れ親しんでいると予想された 20 代の教員が、実際には「授業は基本的に英語で行う」ことが重要だと認識している割合が最も低く、実践していると回答した教員の数も最も低いという結果となった。この結果についてさらに掘り下げるため、予想される複数の背景的要因について相関を調べた。

まず、項目 11「過去5年間の私的な英語教員研修の受講回数」について、教員が自己研鑽への意識をどの程度有しているかの指標となるのではないかと考えた。そこでそれぞれの項目に回答した教員の回答を年代別にクロス集計による分析を行った。その結果を表 164 に示す。

表 164. 【項目 11】「過去5年間の私的な英語教員研修の受講回数」の年代別の回数

年代	1回	2回	3回	4回	5回以上	受講なし	合計
20代	4(9.8%)	5 (12.2%)	2(4.9%)	1 (2.4%)	13 (31.7%)	16 (39.0%)	41 (100%)
30代	6 (8.2%)	5 (6.8%)	5 (6.8%)	3 (4.1%)	23 (31.5%)	31 (42.5%)	73 (100%)
40代	8 (12.9%)	6 (9.7%)	2 (3.2%)	3 (4.8%)	28 (45.2%)	15 (24.2%)	62 (100%)
50代	7 (8.3%)	5 (6.0%)	11 (13.1%)	0 (0.0%)	27 (32.1%)	34 (40.5%)	84 (100%)
60代	3 (27.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (27.3%)	5 (45.5%)	11 (100%)
全体	28 (10.3%)	21 (7.7%)	20 (7.4%)	7 (2.6%)	94 (34.7%)	101 (37.3%)	271 (100%)

注: ()内は各年齢層の合計人数に対するパーセンテージ

項目 11「過去5年間の私的な英語教員研修の受講回数」に関して、30代、40代、50代では年代間での研修受講回数に大差は見られなかった。ここで公的な研修への参加について年代別に比較してみる。公的な研修のうち都道府県と市町村での研修の受講率を比較したところ、どの年代においても都道府県の研修への受講率（全体として 48.0%）の方が市町村の研修への受講率（全体として 15.5%）よりも高く、都道府県の研修への受講率は、20代（51.2%）、30代（58.9%）よりも40代（45.2%）、50代（44.0%）、60代（9.1%）の参加率が低いことが分かった。そして、30代においては、28.8%の教員が都道府県の研修を5回以上受講していることが分かった。

次に項目 19「現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識」について、受験勉強に対する学校としての意識が、大学入試で求められる英語力を生徒に身に付けさせるべきだという理念に反映されて、それによる授業

形態への影響が考えられるとの予測を立てた。そこで、この二つの項目に焦点を当て、それぞれの項目に回答した教員の回答を年代別に見た。その結果は表 165 になり、項目 19「現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識」に関しては、どの年代も大きな差は見られなかった ($F(4, 266) = 0.13, p = .97$)。

表 165. 【項目 19】「現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識」の年代別の意識度

年代	高い	どちらかと言えば 高い	どちらかと言えば 低い	低い	合計
20代	17 (41.5%)	14 (34.1%)	8 (19.5%)	2 (4.9%)	41 (100%)
30代	32 (43.8%)	22 (30.1%)	13 (17.8%)	6 (8.2%)	73 (100%)
40代	26 (41.9%)	19 (30.6%)	14 (22.6%)	3 (4.8%)	62 (100%)
50代	41 (48.8%)	26 (31.0%)	9 (10.7%)	8 (9.5%)	84 (100%)
60代	4 (36.4%)	5 (45.5%)	2 (18.2%)	0 (0.0%)	11 (100%)
全体	120 (44.3%)	86 (31.7%)	46 (17.0%)	19 (7.0%)	271 (100%)

注: ()内は各年齢層の合計人数に対するパーセンテージ

上記の結果をさらに掘り下げるべく、項目 115・134「授業は基本的に英語で行う」の重要度、実施度と項目 11「過去5年間の私的な英語教員研修の受講回数」、項目 19「現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識」それぞれの相関分析を行った。

まず、項目 11「過去5年間の私的な英語教員研修の受講回数」と項目 115・134「授業は基本的に英語で行う」の重要度、実施度に関しては、重要度と研修の受講回数との間 ($r = .07, p = .23$) にも、実施度と研修の受講回数との間 ($r = .03, p = .63$) にも相関が見られなかった。

また、項目 115「授業は基本的に英語で行う」と項目 19「現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識」に関してはほぼ相関は見られない ($r = .14, p = .02$) という結果であった。さらに項目 134「授業は基本的に英語で行う」の実施度と項目 19「現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識」に関しても、若干の相関は見られるも、ほぼ相関関係はない ($r = .11, p = .06$) という結果であった。

このように、本研究の調査では、英語教員が授業を英語で行うことをどの程度重要と認識しているか(=重要度)と、実際に英語で授業を行っているか(=実施度)と、本務校の受験意識との間には相関は見られなかった。

4. 調査のまとめ

本研究では以下の研究課題についてデータを収集し、分析を進めてきた:

研究課題1: 英語の学習指導要領に明記されている英語教育の理念や目的および言語活動の実践に関して中学校および高等学校の英語教員がどのような意識を持っているか

研究課題2: 英語の学習指導要領に明記されている英語教育の理念や目的および言語活動の実践に関する中学校および高等学校の英語教員の意識がどのように変化しているか

研究課題1に関しては、アンケート項目により程度の差があるものの、概して多くの教員が英語の学習指導要領に明記されている英語教育の理念や目的および言語活動の実践に関して賛成して、実施していることが判明した。研究課題2に関しては、経年変化が見られた項目もあれば、ほぼ変化のない項目もあった。

本調査によって、実際の指導の現場において、英語教育の理念や目的がどの程度実践されているか、客観的なデータを示すことが出来た。また、それが実践されない場合、どのような要因が障壁となっているかについて、多少の示唆を与える分析を進めることが出来た。さらに、要因について検証を進める中で校種、地域特性、クラスサイズ、進学校であるかどうか、など多種多様な可能性が浮かび上がった。そして、英語教育における理念と実践を各教員がどのように自分の授業の中で結びつけていくか、そのために必要な手立ては何か、ということをさまざまな要因ごとに検証していく必要性が示された。

5. 教員の意識はどう変わったか—調査を終えて

今回の調査からいくつか重要な点が明確になった。その最も大きなものは、英語の授業は英語で行うべきかどうかという点に関するものである。中学の教員も高校の教員もその大切はおおよそ認めているものの、必ずしも実施していない。その理由としては、英語で授業を行っていない場合は、教師自身の英語力への自信のなさが関与しているように思われるし、生徒の英語力、興味関心等のなさと関連があるようである。逆に、英語で行っていると答えている教員の理由のトップに生徒の興味関心がランクされ、教師自身の英語力自体は、6位と、必ずしも高くないことが分かる。つまり、もっとも大切なのは、生徒が興味を持てるような内容の授業を行うこと、ということになるのだろうか。

また、文部科学省が英語の授業は基本的に英語で行うことを推奨している理由としては、英語が実際に使われている環境が生徒の周りにないので、それを作り出すことが生徒の英語によるコミュニケーション力を育成するうえで欠かせないという思いがある。しかし、生徒が英語で自分の考えなどを表現できるようになることが大切だと認識しているのにも関わらず、それが英語で授業を行うことと繋がっていない。つまり、生徒に英語によるコミュニケーション能力を身につけさせることの重要性和教師が英語の授業を英語で実施することの重要性の間にギャップがあるのである。

また、年代別に見ると英語の授業を英語で行うことに対する肯定的な意識が20代の教員がもっとも低かった。また、実施度に関しても40代、50代の教員とは有意差が見られた。一般に、若い教員ほどコミュニカティブな授業を好み、実施している

ものと思われる向きがあるが、今回の調査では、逆に、経験豊富な40代、50代の教員の方が英語で授業を行うことについての意識も実施度も高いことが分かった。教育経験がまだ少ない若い教員の方がどちらかというと、理念的には分かっている、実践に結びついていないのかもしれない。

教員研修にどれだけ参加してきたか、ということと英語で授業を行っていることとの間に相関がないことも、このことと関連しているのかもしれない。つまり、若い教員は、大学の教職課程で英語教育に関する「講義」は受け、教育実習においても、実際に教える経験をするより、ベテラン教師の授業観察が多いケースがあるが、単に英語教育について講義を受けたり、他の教員の授業を見ているだけでは、自ら授業を英語で行うことにはつながらないのかもしれない。教員研修も同じで、単に講演や講義を聴いているだけでは、教員の実践を変えることは難しい、ということになるのではないかとと思われる。つまり、研修でも、ワークショップやモデルティーチングなどの実践を伴うものをもっと必要なのかもしれないのである。

最後に、今回は、10年前に実施した調査との経年変化を見ることを大きな目的にしている。そこで、この10年間で何がどう変化したかについてみてみよう。

まず、中学教員の変化を見ると、「高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない」「英語を入試などのテストに合格するために指導することは重要である」に関しては、今回の方が前回より賛成意見が多いことが分かる。逆に、「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」という項目は下がっていることを考えると、10年前に比べると、現在の方が、単なる「理想」や「理念」から現実的な英語力の育成の大切さに関する関心が高くなっているのかもしれない。この点をさらに裏づけるものとして、「生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用して指導する」ことについて賛成が増えているのである。

それに対して、より細かい言語形式へのこだわりが少なくなってきたことは、「文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書かせる」や「質問や依頼などを聞いて適切に応じさせる」という項目に対する回答が下がっている点からも読み取れるだろう。

では、高校はどうか。高校の教員も中学の教員と似た傾向を示していることがわかる。高校教員でも「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」の重要性は下がっているし、「世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む」という理想に対する回答も下がっている。

また、「生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える」「文型・文法の解説をする」「リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら話させる」という言語形式を重視した項目に対する回答も重要性が下がっているのである。

それに対して、「目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる」「聞いた内容について、概要や要点を書かせる」「より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする」「場面やことばの働きを設定して書かせる」「幅広い話題について話し合ったり（問題点や原因などを考え、意見交換する）、討論したり（賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する）させる」などの実践的でコミュニカティブな英語力の重要性に対する認識が高くなっているのがある。

この10年で教員の意識は確実に実践的なコミュニケーション力の育成の重要性に向いてきているようである。また、国際共通語としての英語の重要性への認識からか、個別の言語文化等についての関心は下がっていることがわかる。今後は益々グローバル化されていくであろう世界に向けての日本の英語教育の在り方をしっかり見つめながら教育改革を進めていかなければならない。

引用文献

- 文部科学省 (2014) 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～ Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm (最終閲覧日 2017年5月6日)
- 文部科学省 (2015) 平成27年度「英語教育実施状況調査」の結果 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1369258.htm (最終閲覧日 2017年5月6日)
- 吉田研作・藤田保・渡部良典・森博英・鈴木栄・長田美佐 (2004) 『中学校・高等学校段階で求められる英語力の指標に関する研究報告書』 文部科学省.
- Gorsuch, G. (2001). Japanese EFL teachers' perceptions of communicative, audio-lingual and yakudoku activities: The plan versus the reality. *Education Policy Analysis Archives*, 9(10). Retrieved from <http://epaa.asu.edu/ojs/article/view/339/465> (2017年5月6日)

執筆協力者

- 加藤万紀子 上智大学大学院言語科学研究科 言語学専攻 博士後期課程
- 木村 健太 上智大学大学院言語科学研究科 言語学専攻 英語教授法(TESOL)コース 博士前期課程
- 成瀬波瑠奈 上智大学大学院外国語学研究科 言語学専攻 英語教授法(TESOL)コース 博士前期課程 修了
現在 東邦大学付属東邦中学校高等学校 教諭
- 古藪 諒太 上智大学大学院外国語学研究科 言語学専攻 博士前期課程 修了
- 武藤 周子 上智大学大学院言語科学研究科 言語学専攻 英語教授法(TESOL)コース 博士前期課程 修了

添付ファイル資料

1. SurveyMonkey®のアンケート
2. アンケート調査への協力依頼状

日本の中学校と高等学校における英語教育の理念や目的と言語活動の実践に関する教員意識調査

現在日本の英語教育は大きな転換期に差し掛かっています。グローバル化に対応した新たな英語教育として、中学では授業を英語で行うことを基本としたり、高等学校では発表、討論、交渉等のより高度化した言語活動を授業に取り入れるなど、英語教育の改革に関するさまざまな提言がなされています。そして、それらは次期学習指導要領に反映されることになるでしょう。

本アンケートは、公益財団法人日本英語検定協会の英語教育研究センターからの委託研究として、上智大学言語教育研究センターのセンター長、吉田研作を中心とした研究班が実施しています。本調査では、中学校や高等学校の英語教員のみなさまのご意見を集約して、今後の英語教育を考える際の参考として、また、次期学習指導要領の策定のための資料として文部科学省や教育委員会などに活用していただくことを主な目的としています。そのため、できるだけ多くのご協力をいただきたいと思います。

本アンケートにご回答いただいた情報は、本調査の目的以外には使用いたしません。また、個人が特定できるような情報は一切公表いたしません。調査結果につきましては、英語教育関連の情報誌、学会誌等を通して公表する予定ですが、個人的に研究報告書を送付希望の方はアンケートの最後のご意見欄にメールアドレスと送付希望の旨お書きください。研究報告書ができましたら、デジタル媒体でお送りいたします。本調査に関するご質問等ございましたら、yosida-k@sophia.ac.jpまでご連絡ください。

みなさまのご協力をよろしく願います。

研究班代表

上智大学言語教育研究センター長

教授 吉田研作

あなたについてお答えください。

下記の回答者に関する質問へのお答えを選択肢の中から1つずつ選んでください（18のみ複数回答可）。

* 1. 年齢

- 20代
- 30代
- 40代
- 50代
- 60代

* 2. 性別

- 男性
- 女性

* 3. 英語教員歴

- 5年以下
- 6~10年
- 11~15年
- 16~20年
- 21年以上

* 4. 過去5年間の英語教員研修受講経験

- ある
- ない

* 5. 過去5年間の国による英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 6. 過去5年間の都道府県委による英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 7. 過去5年間の市町村委による英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 8. 過去5年間の中英研・高英研による英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 9. 過去5年間の学会の参加回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 10. 過去5年間の民間企業による英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 11. 過去5年間の私的な英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 12. 過去5年間の海外での英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 13. 過去5年間の上記以外の英語教員研修の受講回数

- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回以上
- 受講なし

* 14. 現在の本務校の所在地(都道府県名)

* 15. 現在の本務校の区分

- 国立
- 公立
- 私立

* 16. 現在の本務校の校種

- 小学校
- 中学校
- 高等学校
- 小中一貫校
- 中高一貫校

* 17. 現在施行されている学習指導要領の内容を知っていますか。

- はい
- いいえ

* 18. 過去3年間でご担当経験のある学年（複数回答可）

- 小学校
- 中1
- 中2
- 中3
- 高1
- 高2
- 高3

* 19. 現在の本務校の受験勉強に対する学校としての意識

- 高い
- どちらかと言えば高い
- どちらかと言えば低い
- 低い

* 20. 過去3年間の担当クラスの平均生徒数

- 20人未満
- 20人以上

* 21. 過去3年間にチームティーチングの経験がありますか。

ある

ない

英語教育の理念・目的

下記の英語教育の理念や目的に関する意見にどの程度賛成か、そのお答えを選択肢の中から1つずつ選んでください。

* 22. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、主に聞き、話す能力のことをいう。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 23. 実践的コミュニケーション能力と言った場合、聞き、話す能力だけでなく、読み、書く能力もさす。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 24. 海外旅行などの海外における社会的場面で英語が話せる観点から、英語を実践的に活用する能力の育成が必要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 25. 国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、積極的に国際交流などを行っていくための資質・能力の育成が必要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 26. 英語を実践的に使うことが出来なければ日本及び日本人はこれからの国際社会で取り残されてしまう。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 27. グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 28. 小学校においても、より体系的に英語を指導するべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 29. 小学校・中学校は、連携して相互乗り入れ授業、カリキュラムづくり、指導計画作成などを行う合同研修などを行うべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 30. 中学校卒業時には、だれでも簡単な英語を読んだり書いたりできなければならない。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 31. 中学校においては、生徒が英語に触れる機会を充実するために、生徒の理解の程度に応じて、授業は基本的に英語で行うべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 32. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で聞いたり話せたりできなければならない。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 33. 高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 34. 英語を入試などのテストに合格するために指導することは重要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 35. 生徒が英語を好きになるように指導することは重要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 36. 生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 37. 英語を学ぶことにより、生徒が自らの視野を広げることができるような指導をすることは重要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 38. 英語を学ぶことにより、生徒が海外旅行やホームステイに困ることなく参加できるような指導をすることは重要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 39. 小・中・高を通じて、「英語を使って何ができるか」という観点から一貫した教育目標が必要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 40. 英語の授業においては、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 41. 4技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、学習到達目標を設定し、指導・評価方法を改善すべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 42. 主体的な学びにつながる「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を重視し、多面的な評価方法等を検証・活用すべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 43. 入学者選抜における英語力の測定は、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 44. 国において音声や映像を含めた、デジタル教科書・教材を導入すべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 45. 大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善が必要である。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 46. 小学校の専科指導や中・高等学校の言語活動の高度化に対応した現職教員の研修を実施すべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

* 47. 英語教育においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成すべきである。

- 全く賛成できない
- あまり賛成できない
- どちらともいえない
- ある程度賛成である
- 全く賛成である

アンケート 選択用問題

* 48. 過去3年間に教えたことのある授業を選択肢の中から一つ選んでお答えください。

- 中学校の授業
- 高等学校の授業
- 中学校、高等学校の授業

中学校

下記の活動や指導をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つずつ選んでください。

* 49. 実際に英語を使用してお互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行わせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 50. 文法事項の取り扱いについては、用語や用法の区別などを理解するだけでなく、実際に使わせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 51. 生徒の実態や教材の内容に応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用して指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 52. 学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れて指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 53. 伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書かせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 54. 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書かせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 55. 多様なものの見方や考え方を理解し，公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ教材を使う。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 56. 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに，言語や文化に対する関心を高め，これらを尊重する態度を育てるのに役立つ教材を使う。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 57. 言語活動を行う中で「文法事項」の指導を行う。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 58. 強勢，イントネーション，区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れさせ，正しく発音させる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 59. 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書かせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 60. 家庭生活，学校での学習や活動，地域の行事など生徒の身近な暮らしにかかわる場面を取り上げた言語活動をさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 61. 辞書の初歩的な使い方に慣れ，必要に応じて活用できるように指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 62. 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解させる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 63. 質問や依頼などを聞いて適切に応じさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 64. まとまりのある英語を聞いて，概要や要点を適切に聞き取らせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 65. 与えられたテーマについて簡単なスピーチをさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 66. 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 67. 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書かせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 68. 自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを測れるような話題を取り上げる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 69. 発音と綴りを関連付けて指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 70. 文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 71. 言語活動のうち、特に聞くこと及び話すことの言語活動に重点をおいて指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 72. 音声指導に当たっては、日本語との違いに留意しながら、発音練習などを通して言語材料を継続して指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 73. 聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮した教材を取り上げる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

高等学校

下記の活動や指導をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つずつ選んでください。

* 74. 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養う。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 75. 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 76. 生徒の実態等に応じて、中学校における基礎的な学習事項を整理して教える。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 77. 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して言語活動を英語で行う。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 78. ティーム・ティーチングやペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れ指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 79. 文型・文法の解説をする。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 80. 事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 81. 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 82. 読んだ内容について、必要な特定情報を読み取らせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 83. 目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 84. 内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 85. 未知の語の意味を推測したり背景となる知識を活用したりしながら聞いたり読んだりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 86. 聞き手に伝わるように音読や暗唱をさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 87. 聞いた内容について、概要や要点を書かせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 88. 事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 89. 説明や描写の表現を工夫して相手に効果的に伝わるように話したり書いたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 90. 論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり書いたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

- * 91. 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合いや意見の交換をさせる。
- 全く行っていない
 - ほとんど行っていない
 - 時々行っている
 - かなり頻繁に行っている
- * 92. 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめさせる。
- 全く行っていない
 - ほとんど行っていない
 - 時々行っている
 - かなり頻繁に行っている
- * 93. 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、書かせたり、発表させる。
- 全く行っていない
 - ほとんど行っていない
 - 時々行っている
 - かなり頻繁に行っている
- * 94. より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をすすめる。
- 全く行っていない
 - ほとんど行っていない
 - 時々行っている
 - かなり頻繁に行っている
- * 95. 与えられた話題や条件に応じて、即興で話させる。
- 全く行っていない
 - ほとんど行っていない
 - 時々行っている
 - かなり頻繁に行っている

* 96. 伝えたい内容を整理して論理的に話させる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 97. 場面やことばの働きを設定して書かせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 98. 発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 99. 幅広い話題について話し合ったり（問題点や原因などを考え、意見交換する）、討論したり（賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する）させる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 100. リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴，話す速度，声の大きさなどに注意しながら話させる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 101. 論点や根拠などを明確にするとともに，文章の構成や図表との関連，表現の工夫などを考えながら書かせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 102. 発表の仕方や討論のルール，それらの活動に必要な表現などを学習するように指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 103. 学習した事柄や表現などを発表や討論などの活動で実際に活用するように指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 104. 聞いたり読んだりした内容について，そこに示されている意見を他の意見と比較して共通点や相違点を整理したり，自分の考えをまとめたりさせる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 105. 相手の立場や考えを尊重し，互いの発言を検討して自分の考えを広げるとともに，課題の解決に向けて考えを生かし合うように指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 106. 話したり書いたりする言語活動を中心に指導する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 107. 聞くこと、読むことを有機的に関連付けた活動を行うことによって、話すこと、書くことの指導の効果を高めるよう工夫する。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

* 108. 生徒の実態に応じて、多様な場面における言語活動を経験させる。

- 全く行っていない
- ほとんど行っていない
- 時々行っている
- かなり頻繁に行っている

中学校、高等学校共通

下記の活動や指導がどの程度大切だと思うか、そのお答えを選択肢の中から1つずつ選んでください。

* 109. 英語を聞いて話し手の意向などを理解させる。

- 全く大切だと思わない
- あまり大切だと思わない
- 大切だと思う
- とても大切だと思う

* 110. 英語で自分の考えなどを話させる。

- 全く大切だと思わない
- あまり大切だと思わない
- 大切だと思う
- とても大切だと思う

* 111. 英語を読んで書き手の意向などを理解させる。

- 全く大切だと思わない
- あまり大切だと思わない
- 大切だと思う
- とても大切だと思う

* 112. 英語を用いて自分の考えなどを書かせる。

- 全く大切だと思わない
- あまり大切だと思わない
- 大切だと思う
- とても大切だと思う

* 113. 伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる。

- 全く大切だと思わない
- あまり大切だと思わない
- 大切だと思う
- とても大切だと思う

* 114. 「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた活動をする。

- 全く大切だと思わない
- あまり大切だと思わない
- 大切だと思う
- とても大切だと思う

* 115. 授業は基本的に英語で行う。

- 全く大切だと思わない
- あまり大切だと思わない
- 大切だと思う
- とても大切だと思う

下記の活動をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つ選んでください。

* 116. 英語を聞いて話し手の意向などを理解させる。

- 全く行っていない
- あまり行っていない
- ときどき行っている
- 常に行っている

* 117. 行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分ある。
- 生徒が興味・関心を示す。
- 教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。
- 学習指導要領通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力に自信がある。
- 関連する指導法や教授法などを学んだことがある。
- 入試に必要である。
- その他(具体的に)

* 118. 行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分でない。
- 生徒が興味・関心を示さない。
- 教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。
- 学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力が不足している。
- どのように教えれば良いか分からない。
- 入試に対応していない。
- その他(具体的に)

--

下記の活動をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つ選んでください。

* 119. 英語で自分の考えなどを話させる。

- 全く行っていない
- あまり行っていない
- ときどき行っている
- 常に行っている

* 120. 行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分である。
- 生徒が興味・関心を示す。
- 教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。
- 学習指導要領通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力に自信がある。
- 関連する指導法や教授法などを学んだことがある。
- 入試に必要である。
- その他(具体的に)

--

* 121. 行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分でない。
- 生徒が興味・関心を示さない。
- 教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。
- 学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力が不足している。
- どのように教えれば良いか分からない。
- 入試に対応していない。
- その他(具体的に)

--

下記の活動をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つ選んでください。

* 122. 英語を読んで書き手の意向などを理解させる。

- 全く行っていない
- あまり行っていない
- ときどき行っている
- 常に行っている

* 123. 行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分である。
- 生徒が興味・関心を示す。
- 教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。
- 学習指導要領通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力に自信がある。
- 関連する指導法や教授法などを学んだことがある。
- 入試に必要なである。
- その他(具体的に)

--

* 124. 行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分でない。
- 生徒が興味・関心を示さない。
- 教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。
- 学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力が不足している。
- どのように教えれば良いか分からない。
- 入試に対応していない。
- その他(具体的に)

--

下記の活動をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つ選んでください。

* 125. 英語を用いて自分の考えなどを書かせる。

- 全く行っていない
- あまり行っていない
- ときどき行っている
- 常に行っている

* 126. 行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分である。
- 生徒が興味・関心を示す。
- 教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。
- 学習指導要領通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力に自信がある。
- 関連する指導法や教授法などを学んだことがある。
- 入試に必要なである。
- その他(具体的に)

* 127. 行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分でない。
- 生徒が興味・関心を示さない。
- 教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。
- 学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力が不足している。
- どのように教えれば良いか分からない。
- 入試に対応していない。
- その他(具体的に)

--

下記の活動をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つ選んでください。

* 128. 伝えたい内容を論理的に整理して英語で話したり書いたりさせる。

- 全く行っていない
- あまり行っていない
- ときどき行っている
- 常に行っている

* 129. 行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分である。
- 生徒が興味・関心を示す。
- 教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。
- 学習指導要領通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力に自信がある。
- 関連する指導法や教授法などを学んだことがある。
- 入試に必要なである。
- その他(具体的に)

--

* 130. 行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分でない。
- 生徒が興味・関心を示さない。
- 教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。
- 学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力が不足している。
- どのように教えれば良いか分からない。
- 入試に対応していない。
- その他(具体的に)

--

下記の活動をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つ選んでください。

* 131. 「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、および「書くこと」を結び付けた統合的な活動をする。

- 全く行っていない
- あまり行っていない
- ときどき行っている
- 常に行っている

* 132. 行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分である。
- 生徒が興味・関心を示す。
- 教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。
- 学習指導要領通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力に自信がある。
- 関連する指導法や教授法などを学んだことがある。
- 入試に必要なである。
- その他(具体的に)

* 133. 行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分でない。
- 生徒が興味・関心を示さない。
- 教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。
- 学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力が不足している。
- どのように教えれば良いか分からない。
- 入試に対応していない。
- その他(具体的に)

--

下記の活動をどの程度行っているか、そのお答えを選択肢の中から1つ選んでください。

* 134. 授業は基本的に英語で行う。

- 全く行っていない
- あまり行っていない
- ときどき行っている
- 常に行っている

* 135. 行っている理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分である。
- 生徒が興味・関心を示す。
- 教員の負担がさほど増えない(授業準備に時間・手間がかからないなど)。
- 学習指導要領通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いがとりやすい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力に自信がある。
- 関連する指導法や教授法などを学んだことがある。
- 入試に必要なである。
- その他(具体的に)

--

* 136. 行っていない理由をお答えください(もっとも大きな理由を3つまで)。

- 生徒の英語力・理解力が十分でない。
- 生徒が興味・関心を示さない。
- 教員の負担がかなり増える(授業準備に時間・手間がかかるなど)。
- 学校や学年の指導方針の通りに教えることが大切である。
- 教科書など、現在使用している教材との兼ね合いが難しい(教材の難易度、内容など)。
- 自分の英語力が不足している。
- どのように教えれば良いか分からない。
- 入試に対応していない。
- その他(具体的に)

--

137.

本調査に関連してご意見等がございましたら、ご自由にお書きください。また、本調査の結果を入手希望の方はご連絡先(e-mailアドレス等)をご記入ください。

これでアンケートは全て終了いたしました。ご協力どうもありがとうございました。

研究班代表

上智大学言語教育研究センター長

教授 吉田研作



Sophia Linguistic Institute
for International Communication

Sophia University, Kioi-cho7-1, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8554, Japan

「日本の中学校と高等学校における英語教育の理念や目的と 言語活動の実践に関する教員意識調査」へのご協力をお願い

現在日本の英語教育は大きな転換期に差し掛かり、グローバル化に対応した新たな英語教育の改革案が検討されています。例えば、中学では授業を英語で行うことを基本としたり、高等学校では発表、討論、交渉等のより高度化した言語活動を授業に取り入れたりするなど、さまざまな提言がなされています。また、これらの提言は次期の学習指導要領の改訂にも反映されることと存じます。

このような状況の中、公益財団法人日本英語検定協会の英語教育研究センターから上智大学言語教育研究センターのセンター長の吉田研作を中心とした研究班へ、日本の中学校と高等学校における英語教育の理念や目的、言語活動の実践などに関する英語教員の意識を明らかにすることを目的とした研究が委託され、本アンケート調査を実施する運びとなりました。本調査を通して得られた中学校や高等学校の英語教員の皆様のご意見を分析した成果を、次期学習指導要領の策定を含む今後の英語教育改革の具体的な実施を考える際の貴重な参考資料として、文部科学省や教育委員会などの英語教育政策担当者にご活用いただくためにも、できる限り多くの皆様からご回答をいただくと幸甚に存じます。授業や校務などで日々ご多忙のことと推察いたしますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、本アンケートにご回答いただいた情報は、本調査の目的以外には使用いたしません。また、個人が特定できるような情報は一切公表いたしません。調査結果につきましては、英語教育関連の情報誌、学会誌等を通して公表させていただく予定でありますが、個人的に研究報告書を送付希望の方はアンケートの最後のご意見欄にメールアドレスと送付希望の旨をご記入ください。研究報告書を作成次第、デジタル媒体で送らせていただきます。本調査に関するご質問などございましたら、yosida-k@sophia.ac.jpまでご連絡ください。

上智大学言語教育研究センター長
吉田研作

下記URLまたはQR コードよりアンケートにアクセスしてください。

<https://jp.surveymonkey.com/s/MX5JBWW>



上 智 大 学
国際言語情報研究所